

◎聖賢

▲聖賢
と云ふ意味は前々に委うべき
きたり

▲災
總て身に降ること即ち災は
ひを云ふなり

▲胡虜
世の人にまさけりわらはる
よまの耻をかく事

▲虚名をもて元と爲す
うそを云はす虚名を尊ぶの
事本でもあらざる事

◎愚者

▲我身のほごも入辨ぬ
自分の身の上は如何である
やらそれぞ知らぬこと

◎聖賢

常に一點の過ちなく、能く其言を正し、能く其行を全うて、
仁あり義ありて、禮に厚く、智に深きこそ、眞の聖と云ふべきなり
り○世に賢人と呼ばれむには、行を正うして徳を積み、能く身
を修めて家を齊ふにありとは、古の人の書遺せる、ものゝほんに
記されたり○遠き災を思ひ量りて、近き憂を除かむこそ、賢人
の行ひされ○常々より身を修めて、世の胡虜とあらぬやう心せむ
こそ、賢人の行ひされ○聖賢の道は虚名をもて元と爲せば、
唯信を專とすべからず、夫信あれば人樂み、人樂めば國樂ふと
聞く

◎愚者

他の事情の良否は、争でか職り得らるべき、日頃我身のほごも入
辨へねば、嗚呼憂しや〜○如何に愚ければとて、我が姓名位は

▲今更詮術なし
今更なつては外にしつたが
なす事なし

▲盲目の如し、蛇に
追はるゝも恐しと
は思はるるあり

めくらのやうに、蛇に追は
れても其蛇の事を知らぬ
ら恐れぬと同じこと、唯
むやみと云ふ意なり

◎婦女

▲襤褸
やぶれはてたるぼろぼろの
ソコとなり

▲月も羞ぢ○花も耻
しう覺え○國を傾
け○世を亡ぼす

◎婦女

讀み得らるゝやう成るべきに、生れつゝの文字嫌ひされば、今
更詮術なしとして、投棄てぬること最惜しや○文字を職らねば、
書を読むことあらず、書を読まねば、世の情状を辨知らず、世の
情状を辨知らねば、道理の立つべき筈なく、唯我獨思ふが儘を行
はむのみ○愚ある者は盲目の如し、蛇に追はるゝも恐しとは思は
ざるあり○我は愚者ありと、自云はねばあらぬ身上ありとは、開
行く今世にとりて最耻しきことよ

美き綾絹を身に纏ひ、玉の釵、黄金の櫛を飾れるも婦あるべく
破れはてぬる襤褸を被り、竹を折りて簪とし、枝切を挿して笄と
あせるも亦女あり○月も羞ぢて雲の彼方に隠れ、花も耻しう覺え
て、其瓣を閉づる程に美しければとて、身の行ひの正からずは
眞の女とは云はれませし○三ヶ月のやうなる眉の下に、鈴を張れる

若の諸句は非常なる美人な
ることを去ひ示すに用ゆる
形容のことばなり

▲たはれ女

行ひのみだれた女なり

○童兒

▲覺束あまきことば

あてにならぬ事即ち一かに
出来るか出来ないか、全く
あてにならぬことば

▲人と成りてのふち

成長したのちと云ふ事

▲斯る折りの教へて

を實に〜要する

▲かやうなるときに教へ〜む

如き眼元涼しく、一度笑へば國を傾け、世を亡ぼすまでの女さへ
ありと聞く、嗚呼恐しのことどもかき○身は襦袢に包まるゝとも
操正くば眞の女あるべし○姪女の身の行末を思へば、唯々涙は
かり

○童兒

幼して智慧敏きものは、老いての後までも賢きものあるか、今
更に思ひ考ふれば、實に〜覺束あまきことばある○神童よく
と呼ばれたるものながら、人と成りての後、殊更に愚らしう視ゆ
るものあり、嗚呼憂しや○童兒の心慮は、清き水に齊しければ、
唯一點の濁りを加ふるも直に汚れ穢れをむ○清き幼兒の心を濁さ
ば、老い果つるまでも澄みやらす、斯る折りの教へて、實に〜
要することぞかし○夏草樹は、嫩の頃より蕪高しとは云へ、之
を育で、生長たしむる道に心せずば、唯名のみにて實さきに至る

まごころの方法は何より大切
だと云ふこと

○壯年

▲ひた走りに進まむ

一歩不亂に前へ〜と意を
わしることなり

▲氣性

きーやうなきがとよむ世併
一金くさむなる意味はうま
れつぎと云ふことなる也

▲幸多き効あるべけ

れ也
幸福多き機能があらはれる
ければ〜と云ふ事

○老人

腰に梓の弓を張り
腰が非常にまがって居る老
人の事なり

○老人

▲腰に梓の弓を張り

腰が非常にまがって居る老
人の事なり

ことあらむ

○壯年

身も心も猛く勇き噴されば、僅ばかりの障りは、敢て氣にも望け
ず、唯々前へ〜と進むより外餘念なし○幼き折にして能く修め
られたる心慮の花は、人と成りての今日に於て、一入幸多き實を
結びぬ○後前をも思遣らで、ひた走りに進まむばかりの氣性され
ば、事に由りては、最幸多き効あるべけれども、動もすれば過を
ものし易く、量らぬ障に逢ふことあり○雄々しき心あれば、身體
も亦自と勇ましうて、何事もはかどり易く、却々に嬉さふしも多
かるべし

○老人

腰に梓の弓を張り、額に四海の浪を寄する、翁と媪の姿やゆかし
○最早や八十路の阪を越へて、孫に孫見る年ながら、朝は疾より

▲瀬に四海の浪を寄する

ひたひたにくるさん、波がよつてちやうど浪形のやうだと云ふことなれば是亦老人のことなり

▲強く曲れる

甚だうまがったると云ふことなり

◎軍人

▲聲音

こゝろをねいろな合せて云ふことばなれども、全くこわねと云へば、唯かろく聲の意として用ゐるなり

▲見ゆるかまされぬ

見ゆるかはらぬがと云ふことなり

山に入り、夕は暮夜更るまで、川邊に漁る翁もありさ○百年近き老いの夫婦あり、孫、曾孫等あまた團欒して、笑興じつゝ世を送るさまの目出度さ、實に蓬萊に遊べる翁と嫗の状態あり○強く曲れる腰を撫でながら、漸うに杖に助けられて山阪を越え、照る日も雨の日も止み間なく、彼方此地に使ひする老いの身は、若きものに先たれて、寄る邊なくも生残れる人あらむか、いたはしきことこそ

◎軍人

勇しき姿して、又勇しき容貌して、殊更勇しき音聲を用ゐつゝ、最勇しう語る軍人もあらし○幼兒に對ひて、笑ひ興じつゝあるときは、やさしう見ゆるかまされども、千軍萬馬てふ盛なる戦ひの場に臨んでは、唯一聲もて、獅子虎狼に勝るまでのあらくれ男を、心の儘に進退せしむる程の威勢あつてはかまはじ○國の爲、

▲争で惜かる入

争うてく惜のうらやま、洗してくをいさよのうらなはなをいさよに世

◎巡査

▲日ごと夜ごと

毎日毎夜と云ふこと

▲災あらせじ

障りのむらさうにうて、まゝとてをまゝにせじ

▲物の理も知らず

事わけを知らしむて、まゝと云ふ事なり

▲顔世

唯母にあまへて居るは、この幼き子をまゝにせよ

◎刑事巡査

君の爲として棄つる命なれば、争でか惜かる入とは、勇しき益良夫の婦しき言の葉どかし○死ぬよくとどの號令に願まされて、妻子を忘れ我身を棄つることのけさげなるよ

◎巡査

日ごと夜ごと、市街の間を巡り、遠き村々峻る山々を行きつ戻りつ、止間あう守り歩く等、真にたやすからぬ務めにこそ○風の朝雨の夕、雪の夜なればとて、敢て休み憩ひもやらで、市町に村郡にも巡歩きつゝ、守りの役に願みける○世の人々の身に災あらせじ、最やすくと日を暮し、夜を明させむとの衛りの務こそ、實に限りあう重きものにぞある○物の理も知らず、殊に喧しう叫び啼り、最悪なる擧ひする男に説諭し、我名さへも知らぬ顔世まゝに迷子を抱いて、懇に助け勞はる等、専らあらしむる心こそ

◎刑事巡査

▲まねびて
まねびて云ふに同じ併し、
まねびては俗にまねをいふこと
ふことを意味する也

▲たゆたふ

如何にやうかどうやうか
かど心をなめすにあらざり
とためらふて居ることを云
ふ

▲去來知らず

こゝでは去來のことばを入
れてきて其事は知らぬよと
思はれたる云方となるなり

◎宗教家

▲まかりて

参りて即まかりこゝてと云
ふことなり

▲高間の原

高間にてまかりこゝばなり

或は俣夫の姿に扮打ち、或は僧人の風をまねびて、彼方此方に經
廻りつゝ、悪き輩、邪ある徒を捕へむとぞすある○態と邪ある

徒の仲間らしうまねびて、其が秘め隠せる奥底のことまでも探
り偵し、俄に巡査ありと呼んで、斯る輩を捕へ縛るを、素より

たやすからぬ業と云ふべし○如何に恐しき魔窟なればとて、敢て
たゆたふこともあく、勇進じて飛込みく、あかに隠れ住める、

鬼のやうなる暴漢を、取りひしぐさの働きあり○些細なる拘摸

あらば去來知らず、刃を持てる盜賊を捕ふる等、恐き務の身よ

◎宗教家

人の修むべき身の程を説いて、天の道、地の理を論しける○天に

神をましくけるよ、地に住める人の身なれば、終日終夜唯直ぐ

ある心もて、正き行ひわれを説いてけり○世にありて正う行

はら、後世にまかりて、殊更に幸多しと教示す向ふもあり○高

▲十萬億土

極樂のこゝにて佛法にまふ
ことなり

▲天に神をましく
ける

とは耶穌教に云ふことば也

◎壯士

▲臂り腕ぐ

やうやく云ひつゝのりて立
ちまわることなり

▲脅す

いろいろの言葉を用ひまき
くの行を示して他人をお
どろかし、おそれしむること
なり

▲義侠心

なと、ごを訓するなり

▲強

むりからと云ふ意になる

間の原こそ眞に人の蓬萊郷なれ、否十萬億土の彼方こそ、最あり
がたき極樂なれど、皆夫々の云ひまへありぬ○事の如何は兎まれ
角まれ、宗教てふものは、世の人の心を和げ、悪き邪ある輩をも
遂に善き道に誘ふ等、最大なる効あり

◎壯士

腕を振り、肩を怒らし剩へ言葉づかひまで勢づけて、彼是を臂り

騒ぐ等、賢き人の眼より見られては、最く耻を限りこそ○唯

々暴れに荒れて、烈う恐しうに立擧ふをもて、壯士の業と心得

ぬる輩もありける○世に壯士と呼はるゝからは、態と暴々しき行
ひもて、人を驚かし、人を脅かすこそ、其が務めなりと思はれる

ものよしと爲す、借も悲きことよ○能く弱きを助け、強きを挫さ

良きを護り、悪きを擯くるを、却々義侠心に富める壯士もあれ

ば、強に恐む者のみとは云はれじ

◎藝妓

▲かみで

なれず事節なりものを用の
あることなり

▲憂い思ひ

しんげいの事

▲媚を捧げ

へつちふことなり

▲せつなき務

昔うなんどなることめと云
ふことなり

◎娼妓

▲筑紫

九州の筑前、筑後をさした
る言葉なれど、全く文語の
意味にては西國を云ふこと

◎藝妓

うるはしき絹を重ね、やわらしき姿して、酒盛りの席には入り、最
面目をかしく笑興する姿、其が心からあるふるまひにや、覺束
まう思はるぞかし○三絃をかきで、いろくさる歌をうたひ、
面白う立ふるまふことをかしく○全心の底を探り偵らば、憂
い思ひこそ多からむに、殊更笑ふて媚を捧げ、愉快らしきおも
ちして、人を慰むるとは、慙れく、最哀れあることにあひあり
ける○藝に巧みさればとて、人を欺待することに迂くば、又人より
も欺待されず、最せつなき務と云はむ

◎娼妓

朝には遠き筑紫の客を送り、夕に近き村里の若人を迎ふ○うるは
しう着飾りぬる衣は、黄金白銀の絳襷にきらめきわたれど、胸
のうちの憂い思ひは、却々に重りがちにて、涙の雨も降るまらむ

になさむ

▲赫熊のやうにかき

みだせる髪

あか毛の熊のやうにみだれた
る髪をふり亂したることを
形容せることばなり

◎滑問

▲臍をかへて笑ふ

非常にをかへてことを意味
するなり

▲四角四面のふるま

ひ

非常にいやんとして、まへ
たてたも言ひなり

◎滑問

か○緑の髪に玉を飾り、龍甲、玳瑁の櫛簪、黄金を結べるもの
もあらむが、喜う感ずることは稀あらむ、思ひの儘に立ふるまひ
赫熊のやうにかきみだせる髪ながらに、父母の膝下にて勉め働か
むことを願ふものもあらむか○姫女の心あらば、うき川竹の身こ
と、却々に面白からむ○笑ふて異邦の客を迎へ、泣いて御國のま
ま人を送る

をかしからぬことまでも、臍をかへて笑ふべく、腹立てすとも
済むべきことに、態と眼を怒らし頬脹らして云ひ響るまの面白
さ○或は踊り或は舞ひ、或は歌ひ或は吟じまじ、くまぐまの藝術
をまねびぬることのをかしく○滑稽らしき容貌、四角四面のふる
まひ、乍ら變り俄に代るすばやき術ゆ○客人の望みと云はら、猫
の咆り犬の叫びは素よりのこと、鼠のやねして忠と鳴き、牛と成

▲すばやき術

きほめて速なる一かたき云ふこと

◎俳優

▲七十路の阪を越えたる

七十以上の老人と云ふ事

▲雲の上の貴人

従五位以上の高き官人を云ふ

▲娟姫

美しい女と云ふことなり

▲假装

かりに其姿をする事

◎美人

つて髪を降ける等、最をかしようふるまふ心や如何に○酒に酔へるも酔はぬふりし、又酔はざるも酔えるまねする等、専せつあからむ

◎俳優

年若き男子ながら、殊更荒暴しき猛者に扮打つこともあり○最早や七十路の阪を越えける翁なれども、二九ばかりのうら若き娘に装ふたるさま、水も滴るやうに美う見ゆるとは、驚入るばかりにこそ○或は雲の上の貴人に扮打ち、或は賤しき賤の女に擬り等して、さまざまある技藝をもつるあり○今朝は鬼神をも取りひしがむする猛き武夫と成りて立ちふるまひし身が、夕には花をして差入らしめ、月をして雲に隠れしむるまでの美しき娟姫に假装ひぬ○巧に妙なる技藝は、舞臺の花あり又實あり

◎美人

▲雪を欺く膚

まつしろなるもらだの事也

▲心ばへ

心意即常々の考へ心掛けのことなり

▲云はむかたあし

何ともいへしと云ひやうがな

▲楊貴妃、保姫媛

貴妃は唐の玄宗に仕へ保姫は周の幽王にかうごき何れも名高き美人也

◎父母

▲心を盡し意を覃めて
非常に心ばいなりたり、思ひを煩はしたりと云ふ事なり

雪をも欺く膚あれば、衣を通して見え透きぬ○古小野の小町とやらむ云へる姫あり、うるはしき姿、うつくしき顔をもちながら、歌の道にさへ妙へありきと聞く、是れ真の美人あるか○艶と美しい衣を重ねよそははずとも、自とうるはしき容貌の現はるゝこそ、真の美人とや云はむ○如何に容顔よく、姿うるはしければとて、心ばへ願ふらずは、真の美人とは云はれまじ○容姿の美きに任せて、何とあう傲り慢る女あり、其が心を拙きこと、云はむかたあし○楊貴妃、保姫媛の如きは、全き美人あるか、如何にや

◎父母

心を盡し、意を覃めて養育してける愛子の成長を眺めて、最嬉う悦ばしう思はるゝ父母の心慮は、深しと云はむか、大ありと云はむか、否々斯る恵みのはどは、つひ軽々しう外の例へして比べら

それぢぢぢぢぢ

其物ではないけれど、
ふいふふいふなり

生長たむことをほ

りする

大きくなつてくれるやうに
と願ふことなり

兄弟と姉妹

兄弟姉妹

何れも父母の間に生れたる
同じ腹のものなれば兄弟と
かいてはらから姉妹と一
してはらからせよ、兄弟
姉妹と一所にかけるとは
からと誹むべきこと也

かみまものあらじ○子を思ふ父母の心の深縁り、常盤の松のそれ

あらねど、千代の後までも變らざるべし○横ざまに臥せる縁見

を見ては、簡はむことを願ひ、簡入るを眺めては起たむことを祈

り、撫でつ摩りつ、心を盡して養育する親の心はともいかみら

む○唯障りある生長たむことをほりするのみならず、學びて賢う

成れかしどの親の心の有りがたよ

兄弟と姉妹

兄弟姉妹のまからひは、殊更親う睦まじものと知れよ○兄弟の恵

みふかから心もて、弟妹の愛らしき意を汲みて知らばいつもく

睦まじと送らむこと最やすし○兄弟の親しう睦まじかに習ひ

て、姉妹も亦親うありてけり○兄弟のやましき心に誘はれて、

弟妹の願する氣は現はれぬ○弟妹の禮正さふるまひに感じ

てや、兄弟の親しう慈厚な心は、尙親しう慈厚くまらぬ○兄弟

いかに笑はで居ら

るべきや

どうして笑はずに居られや
さやを笑ふ事なり

子孫

はへえむ

にややに笑ふこと即につ
こりと笑ひをふくむことな
り尤も縁兒がホーホ、いな
ご、かろく聲をばつて
笑ふことに用ゐたる古書も
あり

云はむ術なし

何と云ふべき方法もなし
と云ふ事

すがたゆ

此ゆを用ゐたるときあか
はまへの項中にもあり

朋友

姉妹のまからひ睦まじければ、父母の喜び此上やめる○兄弟姉妹
の睦まじき姿を見ては、いかに笑はで居らざるやはとは、日頃父
母の語りたこそ

子孫

父母の膝下に寄りつぎひて、笑ひ興するさまの樂しげある、今更
筆もて書かむやうなく、言葉もて云はむ術なし○母の膝に抱さる

げられながら、父の顔を眺めやりて、竊にはへえむさまの愛らし

さよ○父母の姿の見えざれば、彼方を視やりて慕はしうに首を

傾け、此方を探ねて泣ありくるさまの哀れく○嗚呼祖父さまよ祖

母さまよと、右より左より追ひかけ取纏はる三人四人の孫の姿ゆ

○孫は子に増して愛らしきものを聞けば、一入願世さまやうに見

受けらる○子よりも増して愛らしき孫の姿よ

朋友

友垣

垣と云ひそへたるは、能く
むすび合はり、たてつら
るゝか云ふ意味によせて形
容を示すために用ゐたるま
でなり

砕かむやうさし

砕かむとするも砕くへさし
かたはなむと云ふ事

断金の友

決して我よくの心なく
まことの交はりばりばりばり
親しき友と云ふ事

和樂

云へるにや
まことのさるるをさるるをさる
まことのさるるなり

常に鐵石よりも堅きまで誓ひぬる友もあるあれ○死なばもろ

ともに死なむとまで、固く誓ひたる友垣の間あれば、今更破り

砕かむやうさし○互に結ぶ誓ひの言の葉は、縦令海山は乾き潰る

とも、解き破らるゝものならじ○断金の友てふものゝ交はりば

兄弟にも増して、限りなき情をも結ばれけるあり○新しき友垣に

結ばれぬる誓ひの言の葉は、風吹けばとて破やすべき、雪降れば

とて濁みやすべき○進むも退くも共にせむ、生るも死するも共に

せむ、嗚呼陸の朋よ友よ

人事の部

和樂

今日も嬉しき日和かき、朝まだきより空晴れて、暖る日に照され
つゝ、咲揃ひぬる櫻の花ゆ○憂き思ひとは如何あることを云へる

初年を迎ふ

新年をきかふる事

此身をすまひ

此身をすまひ
此身をすまひ
此身をすまひ

此身をすまひ

此身をすまひ
此身をすまひ
此身をすまひ

艱難

いとどてか

いとどてか
いとどてか
いとどてか

慰み休む

慰み休む
慰み休む
慰み休む

日々のたつぎ

日々の暮かたに云ふ事

足に穿たむ履

足に穿たむ履
足に穿たむ履
足に穿たむ履

にや、今の此身は却々に笑ふより外知らぬもをかし○家族揃ふて

初年を迎ふることの面白きよ○我が父母には、最早や百歳に餘ら

せ玉ふ雨親のいすすあり、是れは最樂きことあるに、三十餘り五ッ

ばかりも曾孫を設けさせられける等、此よき福とこそ云はめ○

壽くして家繼麗ふ、位高うして學びに深き子孫もありぬ

艱難

風吹く朝、雪の夕、いとどてか慰み休む隙もあう、重き荷を肩に

して、市町、村里に駆廻はる身の憂きことよ○如何に身體は健を

ればとて、骨身を碎きて働かずば、日々のたつぎの資も得られず

○幼き折柄父母に分れ、最哀にも我身のたつぎを計りつゝありぬ

○寒き冬の夜ながら、身に纏ふ衣まき、雨ふる夏の夕ながら、足

に穿たむ履もまき、裸身のまに野山に出で、洗足のまに市に

出でぬ○食に乏き身ながら、たつぎの業には怠らず、終日勉め

あしはへんくははつもの
事

○貧困

▲最たるやかきさる

もつてもしりあはるるるるるる

▲立働けばとて

仕事につまはたららして唇
つたからと云ふて却て其効
あつて云ふ事なり

▲業あつてや

仕事もならだめであらるる
と云ふて云ふ事なり

○富貴

▲雲つくばかり

断みけるが、又終夜文を學びて、休憩ふひをさす

○貧困

家として住みつゝあれども、柱傾き床は折れ、軒は碎け屋根は破
れ、雨も雪も漏るゝに任せ、風も塵も吹飛ぶまゝなり○最たるや
かきさるる居れば、夥多の眷族に埋められて、寝るに足らぬ伸ば
しやられじ○朝夕の食をし云へば、僅ばかりの糠汁に過ぎぬとや
ら、涙ながらに女の童の語りける○日々に隙なく立働けばとて、

僅ばかりの儲けあれば、妻子を養ふ資に足らず○名は或家の主と
るも、働さつともむる業あつてや、日々の活計の煙るゝ、立てかぬ
る身の衰れある○夫は日ごとに車を曉き、妻は夜ごとに細をさふ
も、たつもの資金を得るに難し

○富貴

緑させる林の蔭に、雲つくばかりの高樓あり、七色させる敷物は

非常にたかきことをまひま
らはず言葉なり

▲戸帳

窓又は入口にかけたるおり
物なり

▲得にけるをよ

得ることを出来るものだと
云ふ事と餘事事のやうに
云ひなすたるなり

▲富貴をよしてや

金持になるまゝとてても金
持たなるまゝとてや

○勉強

▲過しやられじ

過して行われるものやとて
云ふ事

▲かきさるや

たへられたまゝと云ふ事なり

室ごとに重ねられ、錦の戸帳、黄金の器、四海に名たゝる品々を
集飾りぬる美しきよ○綾錦を身に纏ひ、黄金を積める家に住みて
陸にも海にも珍ある、食と食とに飽さつゝあり○學びに深く智恵
さへ高ければ、貴き位に進められて、山爲す富をも得にけるをよ
○富貴えぬる身ながらに、日頃の徳の高ければ、衆くの人に敬は
れ、樂しき日をば送るめれ○世に優れぬる智恵をもて、勉め勵め
る業あれば、富貴をよしてや、富貴をよめる入る

○勉強

唯一秒の間ありとて、空くは過しやられじ、光陰は是寶あるぞ、
むげに寶を打棄てゝは、遂に富む入る道や絶えさむ○一寸の光陰
とて輕々しくは過されやれ、千代萬代と成るまでには、斯る光陰
の數々を、積重ねずはかきさるや○終日、終夜職に勉め、朝夕
あのとを計りて、學びの道にも断みつゝありぬ○校に登りて文

▲またうら若き

まだ一十年をたつて若き事

▲事缺がじ

不足を云ふ事ばあまの

◎忍耐

▲千々に餘る苦

萬に越ゆる煩

なにも云ふ所の事

▲得むとあらば

得たいと思ふ事ばあま

▲厭ひやらで

いやがる事ばあま

を學び家に歸りて暇に勉む○またうら若き身ながらに、日ごと夜ごとの働さめれば、老いぬる父母の身をいたはり、幼き弟たちを養ふにも事缺がじ○貧てふ餅は鋭くとも、勉むる楯にはよもたつまで

◎忍耐

千々に餘る苦みも、萬に越ゆる煩ひにも、挫け撓まで勉むる身は遂に山爲す富を握り、此よき福を得るならむ○世に勝れ人に優るまでの幸を得むとあらば、常々の苦みを厭ひやらで、能く勉め能く勵むことに心せよ○最早や骨を碎くやうあり、身をも勢破るやうありと、涙をしほり汗を流す、さびしき業に耐忍ば、思ひの儘の富を得んこと、最々易きことにこそ○世に稀なる富をつくり、外に類なき名譽を得むとあらば、常々の苦みに耐ゆるにあり○能く苦みに耐忍ば、世は皆思ひの儘とあらむか

◎怠惰

▲怠りの夢に迷ひつ

ありぬ

なまけて眠つて居ること

▲枕より外弄ぶも

のみ身は

唯々眠るより外何事もし

ぬ人云ふ事

▲否とよ

いや、左様ではな

◎立身

▲とよま

きこりの事なり

◎怠惰

最早や正午近うありけるに、奥深き室に籠りて、怠りの夢に迷ひつありぬ○日ごと夜ごとに勉むべき業はありながら、枕より外に弄ぶもののみ身は、行末如何に成り果てあむか○妻子の涙は、袖を濡らすも、餘所ある雨のやうに思ひて、怠りがちの主あり、否とよ主とは云はれまじ、我が妻や子を養ひ待すば○書籍は室の隅に投棄てられ、釣杆、蜻蛉どりの袋ばかり、殊更たいせつさうに扱はれつあり○隣の幼童は書を繕きて、聲高う讀みつゝわれども憎りがちの徒ものは、犬の鬪相撲、棒押し、山狩、川遊びの外餘念なきやうに思はる、實に悲しき限りにこそ

◎立身

元賤き山樵の子ありしに、日ごと夜ごとの務の傍、人より借り得たる書籍を繕き、一字一に習熟へぬる學びの効や現はれけむ

▲某の試みに擧げられ

成所の試験に合格しては別

▲商にまれ、農にま

能く勉むれば業や

◎成業

▲現はれてや

現はれたのさきさきと

▲豊に世を送る

豊に世を送る

▲能く勉むれば業や

某の試みに擧げられ、問も高く高き位に進められ、古に變はる幸

を得て、思はぬ名譽をものしけり○如何に賤しき業なればとて、

怠らで勉めざば、終にはあるはる幸を得るあり○商にまれ、農に

まれ、又工の業にまれ、能く勉め能く勵まば、何れも身を立て家を

興す、福の種を成らむのみ○十年餘りの前方には、實を擧げて片

田舎を走巡りける身ながら、今某省の大臣として高き位に登りて

ありぬ

◎成業

効も頭よりして能く勵み能く勉めたる効の現はれてや、若いて

の今日は幸多くも、山爲す富を積重ねて、再豊に世を送る、業と身

とは成りにけり○七度八回も過ちて、最早や我身は亡びてけり、

企望は全く絶えてけりと、心細くも撓み挫けむとせる折柄、親し

き友に諫められ、復甘めたる苦みより、遂に思はぬ幸を得て、今

成らむ

入心せしめれば其の業や

成務するもさきさきと

◎幸福

▲團樂

くるまきと成つて家内中面

自うにものせたりたのしむ

▲殊更富榮ゆるには

わらねぬ

たし入に金持とならば云

のさきはしけれと云ふ事

▲良き故にや

よろしい故にあらむ事

の樂みと見るに至りぬ○能く勉めれば業や成らむ、能く勵まば業を

開放むとは、賢人の教へられた、最有りがたき謬ありき○千度

折るども屈すまじ、萬回挫くとも撓むまじ、是さむ業を成す入る

誘ひの言の葉をかし

◎幸福

學びの道に明にして智恵深く、家富榮えて徳高き人とは成りぬ○

富榮えつゝある家ながらに、家族残りあう健なれば、朝夕の語り

夜盡の團樂にも、笑興するばかりにて、幸の上にも福を重ねぬ○

殊更富榮ゆるにはあらねど、百年近き今日とあるまで、病痾てふ

ものを知らねば、唯一粒の藥だに吞まずして過ぎてけりあり○夥多

める子孫等は、當心さまの良き故にや、或は某會社の頭取に擧げ

られ、或は某局の長官に用ゐられ、或は某富家の養子となり、何

れもく福ある身とは成りぬ

◎愉快

▲祈らむばかりに

最早や天地に願ひかけてい
のりたのまぢとするまでに
あまふ事

▲良き實を結ばむこ

と間もあかぬべし

よい効能が出でくる事は近
きうちであらうと三年

▲僥倖

此字を用ゐるときは「ほれ
幸ひまふ事」にぞむ

◎悲哀

▲空う徒に

なにごとくはすたと云ふ

◎愉快

若き頃より、祈らむばかりに望みつゝありけることは、今日感し

くも整ひけり○彼上是よと望ましきことの多ければ、つひたやす

くは調ひがたきものされども、我身は如何にして山爲す幸を得に

けることかよ、嗚呼うれし○學びの道も卒へてけり、今此幸を肩

にして、急ぎ故郷に立歸り、最健にましまする、父と母との顔を

見ば此よさう嬉しかるべきあり○長き年月の苦みも、合日幸に花

と成り、名譽の香を放つゝあれば、良き實を結ばむことを間もあか

るべし○僥も僥倖に逢へることかや、昨日の商ひは夢ならむ、唯

一回の取引にて、數萬にあまる利を得てけり也

◎悲哀

長き光陰を經にける間、空く徒に遊び過せざるにはあらず、彼よ

是よと駈巡りて、立働さぬる身ながらに、運拙くも災多く、遂に

▲日とて夜とて

日であつて夜であつても
はなれぬ事

▲黄泉

後の世と云ふ事

▲後れてけり

先に死なれて「まふた」と云
ふ意なり

◎歎息

▲齟齬ふとは思はむ

ゆきぢぢふ事とは思はむか
つたと云ふ事

▲霜ふりて後の菊づ

くろひまり

◎歎息

如何に運拙き身あればとて、斯くまでに齟齬ふとは思はむりき。

實にく歎はしき限りにこそ○何とて此身は愚なる性質あるか、

幼時よりかたくなにして、我儘なる舉動多く、父母の教へに背

きて、學びの道に怠りければ、最恥くも今のままよ○最早や歎息

をば亡ぼしぬ○一時も早く業を成して、父と母との心を慰め、

樂しき此世を送らむもの、心を單めて職に勵み、日とて夜とて

えらびやらず、立働さぬる甲斐もさう、父も母も病み果て、あは

れ黄泉に赴かれぬ○愛兒を失ふてより、まだ一年も過ぎぬ間に、

又弟に後れてけり也○我身の産を破りけるのみならず、親しき

人々までも苦めながら、此の企計の成らずして、空く年月を重ね

ける折柄、思はぬ病に痛められは、早や手脚さへも儘ならぬ身と

霜がふらぬ中に用心して菊の花の世はを爲すへき事なるに、最早霜がふつて一まふり後では、何のやくにもた、ゆきまふ事なり

▲其機にめはで
よき時節に出まはす一と云事

○活潑

▲悲むことやはある
ひなしむことばはなしむことばふ事なり、併しやはひそひそして言はれつよめたるなり

▲疾く進めよ
早くすしめよと云ふ事

▲是をい
これこそと云ふ意なり

▲たはけ

悲めばとて、霜ふりて後の菊づくろひあり、何の詮もなきことながら、先づせめてもの心やり、人々に語告げて嘲られてむか、嗚呼憂しや○大なる望みありて、學びの道に志し、強く勉め勵みけるに、運拙くも其機に逢はで、空く齡を重ねてけり、歎きてもく餘りあることよ

○活潑

如何に数々の苦みに出遇ふとも、是素より人の世の常のみ、今更歎き悲むことやはある、早く心を取直して、復勉め勵まむ○氣を勵まして疾く進めよ、世の樂みは皆來らむ○笑ふて業に勉めよ、山爲す幸を得るとか聞さぬ○歎けばとて光陰はひまをるまじ能く笑ひ能く樂むで働けかし、自樂まば、世も樂くあらむ○縦令千度の煩ひを重ねるとも、是をむ浮世の常なれば、殊更心を勵まして、たつさの道を計らむのみ○最早や老いけりや、疾く職を停

愚なるいたしめたの事

○落膽

▲天あるかま命あるかま
運命である詮方がない事よとあきらめて云ふことば也

▲石に立つ矢の例
古支那の人にて我父を虎に殺され何とすしかたきなとりにたいものと思ひ、一心に成つて弓を擧げけるが或日其虎を見附けたれば、直に矢を放ち甘く立つたと思ふて行つて見たれば虎ではな

く石であつた、全子供の力ながら一心は恐しいものよ石でも置くからと云ふ事

○奮發

▲千度挫けばとて
幾度し〜と云ふことばからとて決してかまふなと云事

めて遊び暮せよと云ふは、如何するたはけもの言の葉ぞや

○落膽

嗚呼天あるかま命あるかま、此身は日常心を正うし、行を清うして、慈み深くありけるに、災禍ばかり重なりて、悲う月日を送りつゝあり○昨日までは石に立つ矢の例を思ふて、只管勉め勵みけるが、斯う身の障りのみはあらば、如何に苦めばとて其詮かからむ、嗚呼此世に在るさへも厭はしうありぬ○思ひの外夥多の資金を費やして企計てぬる業も、ゆくりやう恐き災に妨げられ、空く水の泡とし消えにき、偕もく悲き限りにこそ○此身は既に天地にも見離されけむ、如何に勉めばとて詮なきやうに覺ゆ

○奮發

必ずく歎き悲むこと勿れ、縦令千度挫けばとて、氣を勵まして勉めまば、遂に山爲す幸を得む○人の世にあるからは、苦み多

▲人の世にめるからは
此の世に生れて居る以上
は云ふ事

▲自起ちて業に就か
む

自分からふんはつて夫々
の業につとむる事と一やう
と云ふ事

◎感謝

▲妻が爲の賢にこそ

私の爲の大事なる、とて事
あるよと云ふこと

▲嬉し涙にかきくれ
つゝあるばかり

多まり嬉うてくゞみだお
こぼれると云ふ事かきくれ
るは前に説いたる通り、さ
即りきとそへてくれる唯そ

ものとして、能く勵み働けよ、勵み働かむ身には苦みまし○縦令
年を重ねたればとて、少しも耻つべきことにあらず、我身是より
師に就きて學びの道に勵まむ○空しく年月を過さむよりは、自
起ちて業に就かむ○世の人々に笑はれむ等を云ふて、賤しき業に
就かむことを耻づるとは、是も勇氣に乏きなり、眞の心ある人
あらば、業の賤きは嘲るまじ、唯勇氣に乏きを笑ふまじ

◎感謝

日頃の恵み深き御心は、妻が爲の賢にこそ○親にも勝る恵み深き
御心もて、最懇に致へ玉へる師の恩を思ひては、今更に嬉し涙に
袖ぬらすばかり○長き歲月の間、姉妹のやうに思召されて、最懇
に交はり玉ひけることの嬉しきよ、今更禮を申すべき道も知らず
唯々御住の方を伏拝みて、喜し涙にかきくれつゝあるばかり○
危くも恐る災に出遇はむとせる折柄、厚き御心もて助救はせられ

ればかりに成つて居るよと云
ふ意なり尙委しう脱げば涙
をながしてはかりなるよと云
ふことと云ふ也

◎謝罪

▲胸のみ苦めはべり

私の心をいため、しんばい
ばりいたして居りますと
ていねいに云ふたる言葉な
り

▲先づ文して

何はともかくも手紙を差上
げて云ふ事なり

▲罪をしも

罪をしと云ふ事なり、併し
一をそへてなすと云言葉
ごかひは前々の頭に委し
と云ふ

◎慶賀

何事もなく済みぬることの嬉しき今更禮の申しやうもなく、唯々伏
拜みつゝあるばかり○神の御恵みあらむかと伏拝みはべりぬ

◎謝罪

思ひの外ある過失にて、恐多くも君の御心を煩はし、今更何とし
て御詫び申さむかと、唯々胸のみ苦めはべりぬ○ゆくりなくも
罪多きわがをものし、重ねくも御身を苦め奉りけることの悲し
き、今とあらば却々に御詫びの道を入さむやうながら、唯此儘
にして過ぎまば、罪ある上の罪を覺えて、最恐しうはべれば、先
づ文して斯くも申納めぬ○限りなきまで最大なる罪をものし、
今更御詫びの申やうなく、唯手を合せて、遙に伏拝みはべりぬる
のみ○怠りの儘に打過ぎぬる罪をしもゆるし給はらば此よさう嬉
し

◎慶賀

▲千登世經にけむ
千年を経たのであるやうに
云ふ事

▲米の年
八十八年のこと

▲大人

とは先方を尊敬して云ふこ
とばなり、併し女には用の
方よろし

▲思ひ立たせられ

思附くはだてられ云ふ
事

◎仕官

▲學びの勤

學問の効能を云ふ事

▲斯る司

かやうなる後向きのことら
と云ふ事

千登世經にけむ鶴の聲、青空高う聞えける朝、最やすくと産れ
させられぬることの目出度さ○つがひの鶴の往復ふ園に、今度新
き亭を設け、千歳と名馳けられけること、目出度さ云はむ方よし
○浮世のさまでして米の年まで過ぎまむこと、最稀まれども、今
度某大人の御子某氏は、斯る目出度年を迎へられけるさへあるに
兩親揃はせられて、百年の祝ひを重ね玉ふ由に聞きはへりぬ、殊
更珍き悦びにまむありける○豫てより思立たせられたることの
整ひけるは、此よき名譽と覺えはへりぬ

◎仕官

若し頃より勵み勉められたる學びの勤現はれて、全權公使の任を
負はせられけること、嬉しむ○君にして斯る司に當らせ玉は、
國の内外の願ひ争ひも、事さう治まりはべらむかし○入しき間遠
き邦に在りて物學びせられける効や現はれけむ、今度某女學校の

▲宮仕へ

宮内者に役人となつてつと
むる事

▲雲井に登られける

高き後についた事を形容し
て云ふ事

◎婚禮

▲かはるぐに壽ぎ

つがひの鶴がかはるぐに
よろこびを云ふやうにして
云ふ事を

▲契りけり

かたく約束をしたと云ふ事

▲ありたきものぞか

し

云云でありたいもの即云云
した事と云ふ事と云ふ事

◎婚禮

教への司をして重き務を擔はれぬ○心清く行正き方あれば、畏
くも宮仕せよとの御仰せ下りて、遠く雲井に登られけること、羨
しむ○外々の人に優れぬる性質あれば、殊更に抜出されて、重き
務めを任せられにき

今日は嬉しくもつがひの鶴の舞出で、千登世を罩むる園の色、緑
ぞまざる頃とはありぬ○常盤ある松ヶ枝高う集ふ鶴の、千登世を
よばふ聲を聞けば、かはるぐに壽ぎて、雙首はへりぬと告げてけ
りさ○雄松雌松の二本ながら、常盤の色は變はらじさ、今日殊更
縁を増して、千年の後まで榮えむことを契りてけり○つがひの蝶
の飛交ふ園は、花の香や深からむ○うるはしき翼を水に濡して、
彼方此方に遊げども、つがひ離れぬ鶴鶴の、陸じまの身を目出た
かりける○婚禮てふものは、最々大切なることながられば、謹み

のことばをこめてのべたる
ことなり

◎出産

▲周母

古史那の周の世に文王の母
君は殊更すぐれたる賢女に
て、其玉を生せられたる前
々即胎内にあるころより教
への道が大切であるに云ふ
事て起つゝ坐はるも行くも
かへるも、見るも聞くも言
ふも、總て一一點の事ま
で氣を附けられたので遂に
聖人を呼ばれたる程の明王
がうまれいでられたと云ふ
事にて世の人々は之を尊ん
で周母と云ふ也

▲子あひむとは

子あひむとはは云ふ事也

◎死亡

▲ゆへりあひむとせら

ふかくありたるものぞかし

◎出産

嗚呼嬉し、嗚呼喜し、つがひの鶴の羽根の下より、最愛らしき雛
の見えける○賢父の性質を受け美き母の姿に似よる、愛子の顔
を見てけるかき○周母の心がけに従ふて、胎育てふことに慎まれ
ぬる某の君は、今日嬉しくも愛子をまうけられさ(最賢き人の愛子
されば、初聲さへも何とさう凛々しく聞えはへりぬ○爪の蔓に茄
子はあらしと云へば、賢き人の子あひむとは、素より智慧深きこ
とあらむかし○新玉の初日かき、うるはしうとし、昇らむとする
折柄、偶然生出でたる鶴の子されば、千年の齡を保たむことを最や
すからむ

◎死亡

如何されば斯くもゆへりあひむとせられけむ、今暫し此世にまじき

れけむ

たばかりに死なれたのはあま
やうと云ふ事

▲あひむとせら

何故ににはりにてあひむとせら

▲同じ舞は開くまじ

同じにはなは開きはせまじと
云ふ事

▲身まがられぬ

死なれたと云ふ事

◎吊祭

▲三十一文字によせ

て

和歌に、あひむとせらと云ふ事

▲祭らむかき

みたせむ祭らむかきと云ふ事

さば、人の爲、國の爲として、最大切なる法律をものせられつらむ

は○あひむとせらも身まがらせ玉ひけるよま、日傾賢き御心
もて樂正しう行ひすまじ、世の人々の手本として、最有り難き方
ありして、嗚呼惜しや〜○玉の如き花は、俄に凋みてけりま、
復同じ舞は開くまじ、嗚呼○今まで賢として備へ飾られる玉
はゆへりあひむとせら、碎けてけりま○掌の玉、簪の花として愛で育て
られし葉は、今日ゆへりあひむとせらも身まがられぬ

◎吊祭

最耻しき言の葉がから、三十一文字によせて吊ひまをさむ○香を
焼き花を捧げて祭らむかき○最きつかしき君が靈魂の大前に、香
を焼き、花を捧げて吊ひはへりぬ○日常さむけふかく交はり玉ひ
けることを思へば、既に此世にはめらせられずも、尙も眼のめた
りに立たせられて、彼よ此よを示し玉ふことの觀ゆかこしげです

受けさせ玉へや

受けさせたれど、此の心も
こころを去れば此の心も
同じことなるなり

喜悅

豫より思設けゆる

企は

前よりかえりついでたる
心くろみと云ふ事

案煩ひける

いんばいいたるを云ふ事

聞くからは

聞いた以上と云ふ事

眉を開さぬ

いんばいひなくつた即ち
ろこんと云ふ事

る、今亡魂を祭り奉らむとて香を焼けば、古にかはらす惠厚を御

心もて、受けさせ玉へや○備ばかりの香華ながら、聊靈魂を慰め
奉らむとて、謹み敬ひて捧げはべりぬ

喜悅

豫より思設けゆる企は、今日偶然も果されてけりや、人の心は去

來知らず、我身ばかりは飛立つやうに專嬉う覺えらる○千々の苦

みも今日とありては、萬樂を成りてけりや○如何に成行くことあ

らむかと、殊に案煩ひける戦ひも、味方の勝軍を聞くからは、争

で悦ばずに居らるゝ、尚祝はすして過さるゝ○豫ての望み整

ひて、幸福多し身とはありぬ、天に登り雲に駈ける心地ぞかし○

日ごと夜ごとの熱き日和に、久しき間雨ふらで、田も畑も熱けき

ひばかり専嬉う思ひける折から、矢を射る如き大雨にて、世の人
々の眉を開さぬ

人の人たる情のお

はさむ以上は

人情をしつてあらせらるゝ

憤怒

瞋

目の一りなり

腫

俗に云ふ眼のほぼけなり

さまで怒りはせま

いものぞ

それ程迄にはらを立てはせ
まいのにと云ふ事

腕を扼り齒を切る

非常にいかり立つるさまを
形容したる言葉也

怨恨

人の人たる情のお

はさむ以上は

人情をしつてあらせらるゝ

憤怒

日頭やさしと容貌も、怒りを帯びては却々に、鬼の姿を現はして

最恐しげに見えてけり○瞋は烈けたらむやうにて、血を注ぎぬる

腫より、恐しげある光は放れぬ○妾も人の片われあり、腹立た

しきこともあらむ、唯々さみくの行ひさらむにはさまで怒りは

せまひものを、去りながら此身の一生に係る大切の出来事あれば

唯笑ふては過されまじ○腕を扼り、齒を切までの怒りのさま、最

怖う見えてけり○髪はさかたら、靴は裂け、口さへ腐う開かれ

て、言ふたびに紅の頬を吐けるやうありき、嗚呼恐しやく

怨恨

殊更堅う誓ひける言の葉も、今日と成りては破られてけりや、如

何さる恨みありて、此身を棄て玉ひしかは知らねど、人の人たる

情のおはさむ以上は、斯くまであらくしうは為されぬものよ備

以上は...

▲為されぬもの

せられぬもの... 如何のわけであつたやらどう

▲ことごとくしう

大へんなる事即大をわきま

○請願

▲最不慮

文章の通り... 最も不慮なること

▲如何にせば

▲只管

○此身の願ひとは遠き異邦にまかりて、學の道に勉めむと

の一事をきりしに、或る邪ある人の嫉心より妨げられ、今尚片田

舎にわびしう住みつゝあるよ、實に恨多きことをこそ○僅ばかり

の云ひ頼りより、ことごとくしう争ひを醸しければ、遂に恨み悪む

こと一方あらす、若し此儘に棄置かば、如何なる騒ぎを引起さむ

とも計られじ、嗚呼煩はし

○請願

茲に謹みて願を奉らむこと、最不慮するわざながら、今彼是を隙

取らば、思はぬ障りの起りやせむと、思ひ煩はるゝまゝに遂に筆

して斯くは請出では入りぬ○真に數多き煩ひことにかまけ、如何

にせば事さう治り果つゝなまかど、思案にいつゝありけるよ、才なき

身には、容易う計りやられぬは、只管君の御示しに預らむことを

祈るばかり○茲に十年餘りの苦みを経て、是より二年もせば總て

唯々一へんにく... なるなり

▲計りやられぬは

計ることが出來ないからと

○企望

▲生けるからは

生きて居る以上はと云ふ事

▲得まはし

得たもの

▲たへへられ

ほめ呼ばれと云ふ事

▲預りたきものよ

かへはりたし即くわんげい

○謝絶

願ひの儘あらむする今とありて、業を續くへと資金に乏しくありぬ

○企望

人として此世に生れるからは、仁義の理を明にして、聖の教へ

の奥儀を極めむことに心せむ○學びの道に心して、大徳の人と呼

ばるゝまで、仁義の理を究めむかゝる○國の爲、世の爲とし聞かば

維他命を捨つるまでの苦ぢればとて、厭ふさく思ひさく、喜び勇

むで勉め勵まむことをはりするのみ○殊更に富ますとも、世に貧

きもの、痲疾のもの等を救ひ助くへと資金を得まはし○疾く學び

の道の奥秘を極め、世に類なき智者とたへへられ、國の爲、人の

爲として働くへと務に預りたきものよ

○謝絶

▲ふさはしからぬ

難好くしてはまらぬの事

▲心もうちをりて

自分の本意ではないけれど、心もわつたのである事

▲組し難きことよ

なやま入りすることは容易には出来ぬ事なり

◎戀愛

▲さからひ

同好ちを云ふことなり

▲相見むこと難し

互に出合ふことは容易に出

殊更危き企にはあらねど、餘りにふさはしからぬ業あれば、妻の

手にしては、却々に及ばぬことにこそ○日頃のよしみに任せて、

奥底まで打開きての望みながら、妻の力もて救ひ参らせむこと、

懇求をし○世にあらびなき望みごとにて、殊の外幸福多き事件を

れば、暫し手助けしてよとの請ひながら、却々に力及ばざれば、

心ならずもことわりてけり○如何に親しき友とちの間柄なればと

て、斯る企には組みし難きことよ○最悪に請はせられけるも、

今の身にては救ひ申さむこと難し、借も悲き限りはこそ

◎戀愛

最悪に交はりけるさからひなれば、今更に袂を分たむこと、實

に涙の種にこそ○今日俄に遠く別れむこと、身にしむまで、專

悲しき○ゆくりなくも公の命により、千里の外に旅立ちする身な

れば、暫し相見むこと難し、實にまよひすらむ浮世とは云ひながら

來りては

▲オマリ

北亞米利にて有名なる大學校の在る所也

▲公の命

政府の命令を云ふ事也

◎親懇

▲争で厭ふべし

争ひていやはある事には、争ふべし、決していやはある事は、いやはある事なり

▲さや

さやの如くさやの如く、さやの如く其出しの掛け、さやとして用ゐる言葉なり

最悪くもさや○君は今オマリノ里にいませば、彼の大軍の怒の

月、如何に眺め玉ふらむ、邊に思ひめぐらせば、専業はしくてさ

む○日頃慕う思ふはとて、國の爲、戦ひの場に臨ませらるゝ身

あれば、さやて涙に袖や濡らさむ○勇しう立せ玉へよと勤めさむ

らせながら、胸に涙のあるとは、最悪しきことよ

兄弟姉妹も及ばぬまでのさからひなれば、身を碎き骨を粉とする

までの苦なればとて、争で厭ふべし○人の子なればとて、其が苦

みは異なるまじ、いで救ひ助けあひかす○最悪ある人あり、親を

失ひて街にさまよひつゝある幼児を慰みて、くさくさの物を取ら

せ、殊更にいたはりける○病の床に臥せる友は、其が結目の破れ

裂けぬ間に、さやの繕ひたさるものにならぬ○親しきさからひは總

て争ひさるからことなり、さやも〜笑ひ盛みてある入るものよ

▲物を取らせ
品物を興へる。世

○訪問

▲誰が訪ひ来ませし
かど

だれか、尋ねてこられたや
らに云ふこと

▲もてあはれぬ

取扱られたこと云ふこと

▲この機

事から即機中を同じ遊戯を
り

○喧嘩

▲云置る

○共々に親しき交りあれば、親子も及ばぬまでにうるはしう見う
けらる

○訪問

緑の柳枝垂れて、柴の戸叩く音に欺かれ誰が訪ひ来ませしかど、
立出でけること三度四度○柴の戸叩く音をする、誰が来ませしか
ど立出で、表の方を眺むれば、風にゆらめく柳の枝、翠の葉蔭
に飛びめぐる燕の数の二ツ三ツ○遙々と訪ひ来ませし友あれば、
一入嬉う覺えらる○千里をも遠しとせず、山を越え谷を渡りて訪
ひければ、あま珍しの人よ、情深き友よとて、最懇にもてあはれ
る○日ごとに音づれて、このなまを尋ねるまで、深き情ある人
あらずば、却々に爲されぬわがまあるよ

○喧嘩

恐くも眼を怒らし、腕をまくり、最むら／＼しく聲ふりたて、

やがてして／＼とたひの、
なり

▲いつ果つ入らぬぞ

思はれず

いつ因果てなほることやら
しかと思ひ定むるわけに参
らぬに云ふ事

▲呆痴

おろかものこと云ふ事

○争闘

▲したゝか

充分に云ふ事に用下

▲さながら

あだりも、即ちさながら
ふことをり

▲夷

云置るあり○誰も彼も物騒う罵り嘲けりて、恰も雲雀の啼るに齊
く、いつ果つ入らぬぞと思はれず○何不禮ものめ叩いて居よ、何呆
痴ものめまかりされよと、送に思ふがまゝを云募り、最喧く罵
りつゝあり○右手を揚げて拂ふもあり、拳をかためて撲つもあり
ぬ○烈しく掴み合ひたるまゝ、右に傾り、左に轉び、血眼と成つ
て顔ぐも拙し○僅ばかりの争ひあらば、左までには思はされども
夥多の闘ひと成りては、今更恐うてまじ

○争闘

烈う打闘ふまの恐しよと、或は頭を破られて顔一而に血に汚さ
れぬる徒あり、或は額の上に大なる瘤の現はるゝまで、したゝか
に撲れぬる輩もありて、殊の外騒がしかりき○猛さめらくれ男共
の闘ひざれば、さながら戦の場に臨めるやうに、命の入惜まで、
最烈う撲合ひつゝありき○開けゆく今の世に生れながら、却々夷

ひらけざる國のあら〜
き人を云ふ

▲野蠻

文明の道な知らぬ夷人の住
めるところなり

○和睦

▲睦み親む

ながよく成つていた〜
じはるごと

▲どりまし

相方の間をほどよくとりし
ちてなごむる事

▲福の神の來ますと

やち
幸福なる神々が來られると
云ふこと、此はよき運勢と
成ると云ふ事

○滑稽

のやうなる暴荒と徒の少からねば、間々恐しき争ひも起るあらむ

か○争ひ鬭ふことは、如何にしても野蠻の人のふるまひどかし○

争ひは我身を破るものなるのみ

○和睦

昨日までは強く争ひ騒ぎぬるものが、今日と成りては、殊の外睦

み親むまご、最〜いぶかしう思はる○誰も彼も最おとさしう交

はりて、親み睦みつゝあることの美しさよ○人々の間柄の、殊更

に睦まは、何より〜目出度うことにぞある○日頃をかめしき徒

も、或る賢き人のとりましにて、春の日和に溶けわたる雪の如く

したい〜に和ぎければ、昨今の睦ま、眞の兄弟も及ばぬやうに

見えにける○人々の睦まは、最〜美う麗まものあれば、其が笑

聲を聞かむとてか、福の神の來ますとやち

○滑稽

▲うごめかす

びく〜と動かす事

▲腮を脱す

此前に解をよる云々の事
あかしと同じく非常にわら
ふことと意味するなり

▲むつかり

なく事をり

○狂亂

▲いたはしき

かぎりなき事なり

▲狂亂

きまひの事なり

常々さまざまの容貌して、面白をかしようふるまふことの巧みされ

ば、殊更に用心して奇き顔を視せられれば、笑はじとして、笑

はずには居られませじ○或は鼻をうごめかして口を曲げ、或は眼を

圓くして頭を振立てながら、奇き聲音もて歌ふまご、一入をかし

う覺えられ、脚を捻り腮を脱すばかりあり○狐のまご聲、犬の咆

ゆるまごをして、周囲の人々を驚かしぬ○子供の眞似して泣きむ

つかり、翁のふりして阿羅くまご、面白さふるまひよ○無理から

顛倒で無理から泣く眞似するまご、殊更に面白し

○狂亂

俄に聲ふりたて、醫騷ぎ、右往左往に駆巡りて泣叫ぶまご、頗る

いたはしき狂亂ひもありぬ○竹を振翳して、市街の間に駆巡り、

理りもなきことばかり云霧るまごの喧しきことよ○元を質せば、

由ある人の妻よりけるに、得も云はれぬ怒の災に遇ふて、俄に心

▲理の事ごとくばかり
り
わけしなにとまきこぼは
かりとまふ事

政治の部

◎立法

亂れ、哀にも斯る物狂ひとは成りてけるとよ○人を見れば、童翁の區別なく、男女のへだてなく、當るを幸に撰ばくも、甚く怖るものにもある○常に學びの道に耽けりて、餘りに心を鬱しぬる爲とやらむにて、今は物狂ひの身とありてけるとか

西東の國々よりも、北南の縣々よりも、公の人々に選出されて、代議院てふところに寄集り、政事との彼是に就いて、最懇に論らふ務もありぬ○多くの人々の代りとして、選舉はられる代議士てふものは世の爲、國の爲、最大切なる政を論らふ身あれば、其任の重きこと、泰山とても及ぶべし○世に政を施かむには、必先づ其が法を立つべき道ありてはかざるまじ○斯く法を立

◎立法

▲代議院てふところ
代議院てふところは、
衆議院と一て五ノ事
▲泰山とても及ぶ
まかは
身は泰山の重に比すまふ

てをありて非常に重きこと
にたせたるわけなれば、
大へんに重しので、泰山と
ても及ぶべしと云ふ事な
る也

▲査し別つ
しつへて取りわけることな
り

▲依怙なく、偏頗なく
めたてうち即自分勝手の方
へひいせざることをなくと
まふ事

▲訴訟の場に預る任
裁判所の判事檢察をまふ事
り

◎行政

◎司法

てむとて、代議院てふところに寄つて人々は、必ず賢き方におはすや如何○國の法を立つる人にして、學びの道に迂しとは、借も危きこととこそ

國を治めむための法律をもて、人々の舉動を質し、良きと悪きを査し別つべきところあり○世の人々の間にして、争ひあり、私事にしては區別を立てむこと容易あらねば、公の道に依りて訂しもらむとて、訴出づるまでの騒ぎを成らば、常々依怙なく偏頗なく眞直に訂定むるところあり、特に裁判所と名附けられぬ○人々の罪の如何を質し、其がふるまひの良否を認むるを、訴訟の場に預る職の任や重からむ○我こそ勝ため負けはせまじと、訴への場に争ふ輩の心や如何あらむ

◎行政

▲くだくしき法律
いろくは混雜して居るほ
ふりつ即世を治むる規則と
云ふ事

▲治まる御世のとき
つ風枝もさびらぬ
世のなか非常にむだや
にをまづつてなる事を云ふ
なり

▲腹鼓を敲つ
非しやうにふるふ事な
り

○經濟

▲知らずはかぢはじ
知らず居てはたまらぬと
云ふ事なり

▲貨幣を用ひ
金錢を用ひること

最くだくしき法律ながら、少も過失さう用ゐられければ、今は

肩さぬ御世と成りぬ○賢き司人もさばれば、政の道殊更に明
にして、治まる御世のときつ風、枝をも鳴らぬ静謐さよ○遣れる
をも拾はずてふ泰平の世されば、高き司の人々は、雲井の空に往
來して、君ノ代を奏すべく、下さずの徒は、腹鼓を敲ちて萬歳樂
を歌ふならむ○學び深き人、智慧高き人等もまづに奇策ありて
君の爲、國の爲として勉め勵みつゝあれば、治まるまじとすれば
とて、何ぞ治まらずにあらんや

○經濟

世を治むへき大切ある道とは、經濟の二字に在ることを知らずは
かぢはじ○如何に學びの道に深くして、智慧高き人さればとて、
貨幣を用ひて世を富ますべき行爲に疎くば、争か國を治り得へぬ
○經濟の道に精しきものは己の身は素よりのこと、國へ著う

▲肩さぬ御世

非常によくをまづて盗人
もはいらぬ位で、戸をし
めずとも安おんであると云
ふわけなり

○警察

▲國民の難儀さから
しめむとて

世の人々のなんぎのなりや
うにと云ふことなり

▲此よまう婦しき設
けにこそ

此上をひりたけいなき組
みだてとあると云ふ事

▲曲漢

わろき人々のことなり

治まりて、肩さぬ御代と成らむこと、最やすかるべきあり○國を
治むる元として、我身をも修めよかし、國は多くの人より成るも
のされば、其人にして榮えさば、國の榮えむこと今更に云はずと
も、最しむること

○警察

浮世てふ悲名あるからは、憂ること哀あること、苦きこと、煩
はしきこと等、願ふはされば、斯る事状よりして、國民の難儀
さからしめむとて、其が賤りの爲に設けられけるところあり、公
に名附けられて、警察署と云ふ○盗人を驅り拘摸を捕へ等、唯國
民の安々と世を送らむことに勉むるのみ○安々と夜を明させむ、
樂々を日を暮らせむとの務されば、世の爲、人の爲としては、此
よまう婦しき設けにこそ○邪ある曲漢を捕へて、直く感ある人々
の便利をものせむには、警察の設けに若くものよし

○監獄

人をあやめたる

人をあやしたり、又はきずなをつけたりなど、組て人に對して惡しきわざをしたる事

悪さの慮

わるきかえへの事也

身に鎖して

からだにくさりをつけられて云ふ事なり

◎監獄

恐くも人をあやめたる悪者、世を傾けむことを企てける輩を多數知れぬまで收囚れて、くさくさる業に勉めしめ、とりくさる教への道を説示し、正心をもてよかし、悪さの慮を除けよかしと、最悪に論しつゝ懲し勵ます入さ設けあり、世に監獄者と呼ばれける○最いかめしき高塚のまかには、夥多の軒を建立へ、數眼りなき人々を住はせけり、去りながら何れも邪ある徒ばかりなれば、唯見るさへも最恐し○身に鎖して働くとは、實にくさる限りにこそ○赤き布子に竹の笠を冠り、帯に鎖を結ばれぬるさま、最々哀あり

辨舌の部

◎演説

例證

ねんせつを爲るに云々のことある斯々のわけがあるに、夫々古から今日に至るまでのたとへを引出すことなり

立板に水を流すに

ことをあらず
非常なるのうへんにてすらくと語り出ることなり

酔へるが如くに

ちやんとあつたやうに云ふ事

◎討論

交もく説出る

いはるく説き立てしこと

鋭舌

烈きまろふのことなり

◎討論

誰彼の論ふところを取つて、最烈う説破りぬ○甲は縦より説來り乙は横より説去りぬ○夥多の人々が順次正しく、交々説出づる言の葉の繁げれば、宛戦ひの場にて、敵味方の間に入亂るゝ、大砲小銃の彈丸のやうに思はれき○舌を闘はして争ふことなれば、其の面白き云はむ方なし○鋭舌を打破らるゝ鈍き言葉の拙げき

遠き古の歴史を例證として彼是と説來り、近き今世の事情を論らひて最面白う説去りぬ○悠々として高き壇の上に登起ち、周圍を視まはして軽く吐拂ひし、儲諸君よと説出でけるさま、殊更にをかしかりき○大なる聲して説立つるさまは、勢猛くして、天をも貫くべく、地をも碎くべきやと驚かれぬ○激みまよ言の葉ぶりの爽あること、宛立板に水を流すにことあらず○最巧なる説ふりには、聽者をして酔へるが如くに感せしめらる

内兜

かぶとの内には即頭を頭に
あつて居るといふを云ふ
なり

辨解

障りありて

しるべのわきには即しや
まじりたる入るものもある
なり

知らずものせる

わけを知らずして爲したこと
なり

心してければ

氣を附けて置いたものを
ふことなり

る、巧みなる論ひに攻寄せられて、内兜を射抜かれたらむやうあ
る説方の哀げあるを何れも面白う覺えられき○一度は説破り、
一回は説破られ、遂に入亂れて論ふるまの勇しらむ

辨解

日頃の思附きあれば、唯僅きりとも誤りまからむことを願ひつゝ
ありけるに、偶然き疾病に妨げられ、二日はかり監督を怠りてけ
れば、斯くも耻ぢらるるまはまりぬ○素より體み深う心してければ
却々に斯くまる過つ入るることはあらねど、如何なる障りありて
茲に至りけるものには、最々いぶかしう覺えぬ、まれば妻の罪と
して咎められむことの悲しむよ○知らずものせる過失あれば、只
管に免し玉はむことを願ふのみ○如何に勉むればとて、斯る願ひ
の央まれば、誤りまはるとは云ひ難し、然れば茲にまはれば深くおは
るば、御推もじもたまはし

談判

口を噤む

だまつてしまつたこと云ふ事

言の葉ぶり

言葉のつかひかたを云ふ事

困じ果て

大へんにだまつてしまつた事
なり

いらへ

應答即返事を

入學

益友とち

談判

勢烈し言の葉もて、能くも相手と説伏せてけりき○甲の説く
ところ理多ければ、乙の論ふところは例證に乏しく、遂に之に抗ふ
術なく、最衰にも口を噤む○火花を散らすやうある言の葉ぶり
には、今更反辨ふべき方便なし○いつまでも怠りて、繰返しく
説立てまは、終には困じ果て、頭を垂れまむ○人に優れて巧みあ
る言葉まれば、彼よ是よと云ふ間もあく、唯夫ありに事あつて止
みけり○殊更頑固ある人あれども、巧みに優れぬる言の葉に蓋は
れけむ、何の應答も泣くばかり

修學の部

入學

今日初めて學びの門に入る身まれば、殊更に心して行を正うせむ

ただちのことなり

疾此由を

いそぎて此うたいを云ふ事なり

筆に寄せて

手紙をして云ふことなり

たうちね

両親のことなり

勉學

休ひやらで

家計の道は忙しけれども、朝あ夕あに時を置りて、書を學べる志こそ頼母しかりける○學びの道に入りてよりは、唯一秒の隙だに措かず、勉め勵みてありけると聞きぬ○立て初むる志だに撓ま

朝あ夕あに

朝あ夕あに時を置りて、書を學べる志こそ頼母しかりける○學びの道に入りてよりは、唯一秒の隙だに措かず、勉め勵みてありけると聞きぬ○立て初むる志だに撓ま

立てとむる志だ

に撓まれば、たつ

ことを望む○幼き童子が學びの門に入らむとて、最嬉しうに書

籍を携へ、二人三人の友とちに誘はれながら、其校をさして急ぎ

脚に馳行くさまのゆかしさよ○あれ見玉へよ、師の前に手をつか

へて禮を陳べつゝある幼児は、今日より學びの門に入らむとて來

にけるあらむ○何の障りもあらず、某校の門に入りてければ、疾此

由を筆に寄せて、たうちねの許に送りはべらむ

勉學

瞬く隙も休ひやらで、學びの道に勵みてけりき○日ごとく勉むる

家計の道は忙しけれども、朝あ夕あに時を置りて、書を學べる志

こそ頼母しかりける○學びの道に入りてよりは、唯一秒の隙だに

措かず、勉め勵みてありけると聞きぬ○立て初むる志だに撓ま

すば、龍の腮の玉も取らるべく、石に立つ矢もめりと聞けば、學

びの道に心して、瞬く隙とて忘らすは、山爲す幸福を手を爲むこ

のわがまの玉もとる

初めに立てた通りの志が少ししたゆゑ事ななりは、はたし難い龍のきき玉にきき玉をとり取る事が出来ることなり

卒業

業を卒へて

卒業してと云ふ事

かつげもの

興へもの即興興の品々のことなり

國にいませざる

故郷なる田舎の國に住むで居られるを云ふ事なり

急ぎ文して

急ぎの手紙にて云ふ事

苦學

と、却々に易からむ○學びの道に勉めれば、萬の幸を得むこと易

し○學びの道に勵まむものは、唯一寸の光陰とて空くは過しやる

まじ

卒業

長き年月の間、學びの道に苦みつゝありけるが、今日は障りあらず

業を卒へて、我故郷に立歸りぬ○今日喜くも業く卒へけるが殊更

外に優れたればとて、夥多のかつげものさへ賜はりけり○今度英

國キヤムブリッチ大學校にて、博士の學位を受けさせられ、最

はある名譽を擔ふて、船路遙に障りあらず歸らせられけること、目

出度さよ○他に優れて學びの業に勵みける勵の現はれて、名譽多

くも大博士とて學位を受けてけりき○最嬉しくも學びの業を卒へ

けるまゝ、國にいませざる父母に急文して告げませむ

苦學

▲購ふす入るへ

買ひしむる一かたぬない
を云ふ事

▲たそがれ

夕方の事なり

▲朝まだき

此は前々に委うてきたり

▲辛じて

やうやくの事はとまふわけ
となるなり

○晩學

▲いやが上にも

ますく重つた上にもまた
く重なるを云ふ事

▲初學び

此通りしひまなびを讀む
事となり、然るにわづら

學びの道に志せども、書籍は素よりのこと。紙筆さへも購ふ術を

く、僅に友の助けに依り、辛うじて勉め勵みつゝあり○夜ごとに

俸を斂き、僅ばかりの資金を得つゝ、朝まだきよりたそがれまで

少しの隙も怠らで、學びの道に阻めける○日に三度の食事さへ儘

さらす、寒さを凌ぐ衣も薄く、專苦を身ながら、學びの業には

懈らで、隙さく勵み勉めつゝありぬ○、骨身を粉にして働つゝ

僅ながらに收むる貨幣あれば、辛うじて書籍を購入れ、苦さる

かより學びする人もありき

○晩學

早や年老いたれば、今更物學びせむこと、最耻しきやうなれども

尙此儘に打過さば、いやが上にも耻さを重ねむこと悲しけれ

ば、茲に心を屬して、某讀本首巻より、硯、筆、紙等を學びそ

めてけりさ○齡を重ねける身ながらに、今日より初學の門に入り

○近地旅行

▲ことぐしう

さやうさんらしう、即大に
あるさやうさんらしうを云ふ事

▲道程

道中の里數を云ふ

▲面白をかしう

なかりうと書くも、面白う
と云ふに同じことなれば、
重ね合せるやうなれども
古よりの慣用にて別に差支

はづまなびをよまする向
あり、面白うら
さやうで難るやじ
それはほまほまに、なんぞで
はあささうさやう事なり

旅行の部

○近地旅行

さやうで遠き旅立ちあらねば、ことぐしう數々の荷物を携へず、

唯一個の手籠包を持つるのみ○旅路とは云ひながら、二泊りばか

りの道程なれば、最悠々と杖を曳き、あたりの景色を眺めながら

面白をかしう脚を運びぬ○つひ最寄りの旅行なれば、二人ばかり

の友を携へ、此方の名所、彼處の舊跡と、ゆるく探ね巡りける

○長閑なる春の朝に、旅行して終日駐巡り、夕に歸る我家の門、

へなく一所にして面白うと
訓すればよろし

◎遠地旅行

▲徒歩
車に馬に乗りずして旅
することなり

▲遍歴る

旅をことごとく、まはり
ゆく事を云ふ

▲今まで過越しける

これまで通りすぎたこと
ふこと

▲思はでありける

思はずに居たと云ふこと
なり

◎海外旅行

▲水や空を眺め

水や空がわたりわやうに
所になつて見ゆる遠きうな

翠の柳は色増しけり○

◎遠地旅行

旅行の樂みは、徒歩にありと、或る旅自慢の人は云ひにき○旅よ
り旅に遍歴りて、名所舊跡を探らむこと、此よまう面白きわざに
ぞありける○彼方此地の花を眺め、遠近の霞の中に歩入ることの
面白きよ○旅寝の夢を覺るむとてか、雲間を離れて郭公啼く○旅
の宿りの窓の下に、唧く蟋蟀の聲を聞いては、却々に眠りもやら
れず○今まで過越しける道程は、左まで遠しとは思はでありける
に、日數を算ふれば、早や一月餘りも経てけるかよ○海車の旅路
は僅ばかりと思ふ間に、百里二百里は過ぎぬるものよ

◎海外旅行

遠き浪路を蹴立てつゝ、馳行く海船の旅なれば、陸を離れて暫く
は、水や空を眺めばかり○山爲す浪のうねくに、浮き漂ひつ

はらのけいまで云ふ事

▲殊更に熱き洋

熱帯地方の海の事なり即印
度洋、亞刺比亞海、マダガ
スカル近海、大西洋中、亞
弗利加の西部より西印度に
向ふところの海上、太平洋
中ヒリピン群島より東に
向ひ、南北亞米利加間に亘
る海等を云ふ

◎修學旅行

▲たどりいりて

一ゴロに歩み入る事を云ふ

▲歴史の條々に對照せ

歴史の條々に對してある事
びらのとらるべくにせしめ
て見ると云ふ事也

馳行く海船、遠き異邦に往來ふ旅路○殊更に熱き洋を渡りて、
俄に深き霧の中に馳入り、寒き颯に吹立てられて、夏と冬とを一度
に見る、奇き旅行をものすることあり○知らぬ異邦に旅行せば、
見るごと聞くごとくに珍なるものゝみあれば、憂を忘れて往復しつ
ゝ、いつの間によら二年、三年を経ぬるぞかし○限り知られぬ滄
海に船出して、行くも歸るも浪の上へ、山さへ見えぬ旅の空、却々
に面白し

◎修學旅行

深き奥山にたどりいりて、古き墳墓の梵字を探り、遠き谷に分け
いりて、奇き温泉の源を尋ねけむ○古の猛き武士が、果敢あくも
骨を埋めけむ跡を尋ね、名たたる戦ひの場の草の露に、靴の紐を
濡しめながら、濼て師より教へられし、歴史の條々に對照はせ、學
びの資料と爲てけり○所々經歷る道のさはなれば、左に名地、

▲却々に煩はし
却つてめんどうであること云ふことなり

○新婚旅行

▲妹背の契り
婚約のこと云ふなり

▲手と携へ
ともに行く事

▲得も云はれぬこと
さうむか

何共云ふの、はなはちさういふに云ふはなり

▲行程
ゆくべき道のへだたりを云ふことなれども、茲ではゆくべき道を訓するをいふ

○無銭旅行

右に古跡、往きつ戻りつ、却々に煩はし○書籍にて十度百回読みける後、漸うにして覚えぬることも、眞の場に就いて學びまは唯一度にて最細に織り得べきあり

○新婚旅行

目出度も妹背の契りを結びてければ、手を携へて旅行せむこと、頼母しよよ○妹背の契りてふものは、正し貞操もて、堅く結ばるべきものなれば、手を携へて旅せむこと、殊更に目出度ものにてこそ○夫よ妻よと呼ぶる身が、共に遠く旅行して、新き山、新き谷、珍き花、珍き鳥等、視るたびこと、樂みは、得も云はれぬことさうむか○正し貞操もて結ばれぬ妹背の契は、初の旅路の春の風、行程の霞を吹拂ひ、専長開けく覺ゆるあり○妹背の儘の旅路には、塵も芥も立ちやらじ

○無銭旅行

▲覺悟の前
元々、其つしりにまめて居るなり

▲脚踏ふ
如何せむと、どう持つと、さういふ事即ちさういふ事ト一ト事をさだめり、ある事

▲梵刹
寺のことなり

▲義捐
義の心を以て金銀品物を出すことなり

○避暑旅行

▲杖をば曳きてけり
旅行をしたと云ふ事

▲こぞりて
疲らすひままでと云ふ事

疲らすひままでと云ふ事

野に寝ね山に憩ふて、遠く旅せむとは、頗る難澁のことにぞある○難澁は覺悟の前なる旅なれば、今更に脚踏ふて、行程の道を返すまごのことやはある○別に用意の資金なければ、或は梵刹の門に潜みて露を凌ぎ、或は社の林下に臥して雨を避け等、苦き旅を経てけるあり○所々志ある人の義捐に依り、くさくさの食を與へられ、一夜の宿りさへも許されけることあれば、別に貨幣の貯へざる身も、却々に面白う旅してけり○草を褥とし石を枕としぬる旅の樂事、耳元近ふ鈴蟲の鳴聲を聞きにける

○避暑旅行

蒸すが如き熱さを避けて、涼風の袂を清めむものと、某の温泉を以て旅行しける○奥山ながら風景うるはしく、殊更夏の夕涼みに設けぬるかと思はるゝまで、熱さ知らずの名地あり、或友に誘はれて、此處に杖をば曳きてけり○晝は却々に涼く、夜は月の

● 燔す

とすことなり

▲ どころもがさ

所におなを添へて何々の所
もほしきものよと望む心を
云現はすなり

○ 避寒旅行

▲ 美き景色に富み

よきけしきも山あること
なり

▲ 頗る賑はし

非常ににぎやかなること

▲ 師走

十二月のことなり即年の暮
をさす

▲ 初めの方

初め方なれどもつと添へた
る也委細は前々にあり

風情深く、熱を避くべきところとして、外に類なきやうに思はれ

ぬれば、家内をこぞりて赴きけり○死を焼かし石を焼くてふ暑さ

されば、暫し避くべきところもがさと、思案じつゝありける折柄

或人の勤めに依り、遠く其地の温泉をさして旅行しけり

○ 避寒旅行

指も落つべく、膚も裂くべきやうに思はるゝ寒さあれば、暫し南

の地方に旅して斯る苦みを避けむか○昨今は殊に寒さ増りて、

膚も凍えむばかりの風模様あれば、暫し某地の温泉に赴かむか

○避暑のみさらで避寒にふさはしき某地の温泉こそ、美き景色に

富み、殊更雪の囀には、世に類なき風情あれば、夥多の人々寄つ

てひて、頗る賑はしきことにぞある○山蔭ながらに南を受けたる

濱邊なれば、寒さを避けむ爲には、程好むところありとて、師走

の初めの方より、多くの人々の集りつゝあるを見る

○ 琴

▲ 峯の松風は琴の音

に通ひてけり

峰の松にふく風の音と琴の
音と同じやうなにつたに云

ふこと、又相方の音が通ひ
合ふたと云ふわけにもなる

尤も松風はリリーと響
いて松風の音に似て居ると

云ふ位であるから、矢張琴
の音にもたとへられる也

▲ 望の月

十五夜の月なり

▲ 想夫戀

山城嵯峨野の奥に住はれた
る小督の扇が君を思ふて弾
かれたる曲なり

○ 八雲琴

▲ 打水

樂器の部

○ 琴

峯の松風は琴の音に通ひてけり、緑深き庭の彼方の樓より、涼

しきしらべや聞ゆらむ○月高う風をきて、庭の翠葉茂れるあかよ

り、琴の音色や聞ゆらむ○琴の音の松風に誘はれて、此方遙に聞

ゆる折柄、望の月は雲間よりもれ出でぬ○蟋蟀、鈴蟲、松蟲等、

我劣らじと鳴立つる折柄、琴の音色のうるはしう聞えける○想夫

戀さらねども、嵯峨野の奥の家居より、琴の音の聞ゆるあり○最

うるはしう聞えつゝある琴の音に、軒端の風は涼うありぬ

○ 八雲琴

長閑き春の朝、霞のあかの樓より、遙に聞ゆる八雲琴の音色をゆ

かしき○夏の夕の園の打水、翠の草樹より滴るゝ折柄、遠く聞ゆ

圓庭に打ちまきたる水のこ
となり

▲限なく

庭のまじり、異なく限りま
かへのなき事

▲竹の組戸せる

竹を以て組合せたる戸を更
に門の扉に用ゐたることな
り

○月琴と一絃琴

▲戸帳

洋風のけりなり

▲調へつゝあるや

月琴をならして居るやうと
云ふ事

▲強くすみまがら

非常にきれいに澄むる居り
ながらと云ふ事なり

る八雲琴の音を澄ける○限なく照りまざる秋の夜月、限りなく清
み渡る八雲琴の音色○杖を垂れて、斜に傾きつゝある、七本ばか
りの老松の蔭に、最すがくしう建設けたる小家あり、柴垣に結
ひ繞し、竹の組戸せる、形ばかりの門のうち、最清く静れぬる庭
の彼方の障子越しに、八雲琴の音色は漏れにき○八雲琴てふ名に
背かて清める音色の聞ゆるときは、彼方の空に入雲や立つらむ

○月琴と一絃琴

大なる芭蕉葉の蔭に圓窓あり、錦の戸帳のうちよりして、清め
るやうる月琴の音色は漏れにき○深き霧のまかされば、何れの館
にて調へつゝあるやは知らねど、桐の葉越しに照る月の、影にま
そはれて琴の音とする○月琴てふ名に背かて、強くすみまがら、
圓く聞ゆる音色あり○唯一絃の琴ながら、澄渡る音色のはど、
何とあうゆかしう覺えらる○秋の夜更けて奥山に、妻戀ふ鹿の聲

▲妻戀ふ鹿

雄鹿を慕ふてなぐこと

○洋琴と風琴

▲學びの舎

學校のことなり

▲氣高

品のよからなり

▲空行く雁も落ちや

せむ、流るゝ水も

停めやせむ

音色のよいため雁も落ち
水もせむと云ふ形容の
ことなり

○三絃

▲行く水、飛ぶ鳥

する折柄、一絃琴の音も聞えま○霜更けていと物波う覺えける
折柄、一絃琴の音色を清みける

○洋琴の風琴

學びの舎の窓の下に、梅ヶ香送る春の風、やさしう吹添ふ折柄に
清みて聞ゆる洋琴の、氣高の音色やうつらむ○最面白う歌はる
ゝ、英語唱歌の聲々は、洋琴の音色に和し、空行く雁も落ちやせむ
流るゝ水も停めやせむ○最うるはしき洋琴の音色に早や空は晴れ
てけりあ○人里遠き奥山に、洋琴の音を聞かば、獅子狼も牙を包
み熊虎あまも爪を隠さむ○最賑はしう聞えてけりあ、臺風琴の高
き音色は○譜子面白う唱歌の聲は、風琴の音に和せられて、最男
ましう聞えにき

○三絃

嗚呼面白の音色やあ、行く水、飛ぶ鳥、駈ける馬、蝶々、蜻蛉や

駈ける馬云々

三絃の音色のまじりか
はりて面白きことを形容せ
ることはなり

かきでられ

鳴らされるときふ事

曲

曲はふいそふふことなれど
も茲では歌ふところの歌に
合はすへき三絃の弾き方を
云ふ也

琵琶

猛者

前々に委くときたり

ふるはしき

同前

奈須與市が扇の的

四國八島の戦ひのとき義経
の命に由つて平家の船に建
てける扇の的を射落したる

蟋蟀、松風、立浪、走る船と、さまざま變はる譜子調子、鬼神の
行爲かと思はれける○數限りなき歌ながら、數限りなくかきでら
れ、妙なる調子妙なる曲、自由自在の音色あり○遠き聲より吹き
おろす、松風の音を迎ふれば、松風の音を聞ゆべく、近き野面に
唧くする、鈴蟲の聲を誘ふときは、鈴蟲の聲と聞ゆべし○巧みに
妙なる音色もて、巧みに妙なる曲をかきで、巧みに妙なる歌を聞
かむとあらば、實に三絃に若くものよし

琵琶

最悲しき曲を變へて、再勇ましく譜子をものし、夥多の猛者が入
亂れて、攻めつ攻められつ追ひつ追はれつ、火花を散して打戦ふ
軍のさまを語るに、ふるはしかりける品にこそ○奈須の與市が扇
の的、佐々木高綱が宇治川の先陣等、琵琶によせてかきでるは、
實に鬼神をも感せしめ、流るゝ水をも潮らしむとやら聞さぬ○遊

名譽あることせら

宇治川の先陣

高綱が梶原景季と山城宇治
川に先渡り争ふたるとも也

笛

肥く邊の牛

充分大くじやうぶに成長し
たる牛の事也

風がもてくる

吹く風につれられてもこと
ること

彌宜

神に仕ふるると、その神官の
役名なり

伽藍

寺の事なり

太鼓と鼓

く聞ゆる琵琶の音も、近く聞ゆる琵琶の音も、妙なる人の手もて
かきで、妙なる人の聲もて歌はど、同じ一つの琵琶ながらに、百
千に變はる譜子や出で來む

笛

遙るる川向ひの堤の上に、肥く邊の牛に跨れる童子あり、節子面
白う吹鳴らす笛の音のすがくさよ○風がもてくる笛の音されば
吹き鳴らすものは誰なるかは知る由もけれど、能く耳傾けて聞く
ときは、南の山の麓なる、社の庭の邊にて、彌宜がものするには
あらずやと思はれぬ○朝霧の奥深き方を眺むれば、牧場に通ふ童
子どもが、牛の背に跨りて、笛を弄ぶさまの愛らしき、笙の聲あ
り筆葉の音あり、翠の森の彼方なる、伽藍の中より漏れ聞えぬ○
笙の聲は天に届り筆葉の音は地を貫かむ

太鼓と鼓

▲陰に響く陽に開ゆ

かすかに響くひびきながら、開ゆるときははつきりと耳立つてなり

▲身に沁みて

心のどこかで、一人をしみこむやうに感ずることをなり

▲かすかに開ゆる

遠方よりすこしばかりの響かざるなり

◎金銀

▲是ぞむ

これこそ愛むに同じ

▲彫刻師の手に成れ

彫り師の手に成るものなり

金属と寶石の部

◎金銀

遙るる山の麓の森の蔭に、夥多の幟を樹てあらうて、最賑はしき祭りあり、太鼓の音の面白さ○七八人ばかりの童子等が、太鼓の周圍に立繞り、我こそ鼓たむと争ふて、最喧しく騒ぐもをかし○遙に開ゆる太鼓の音は、陰に響いて陽に開ゆ○雪更けて、月の照りそふ江の上に、鼓の音や開ゆらむ○専ものすこき響きれば、遙に開ゆる鼓の音も、殊更身に沁みてものさびしう覺えらる○かすかに開ゆる鼓の音は、江の波を動かして、眠れる鷺をも驚かしむ

燦々ときらめきつゝある黄金の塊三ツばかりを、美事に飾れる三、寶盤の上に盛りて、室の傍に据置かれたり○黄金もて製れる鶴の

るもの

ほり師の師が、しちへたもの云ふ事なり

▲模造れる

形をまねして造れること

▲石塊

石のかたまりなり

◎銅鐵

▲くさくさ／＼とり／＼

品もの、いろ／＼さま／＼なる事

▲皆おしきへて

遠く第一所にたきこいで云ふ事

▲價こそ卑しけれ

ねだんは安いけれとも云ふ事

▲用に適ひ

事に

◎銅鐵

つがひあり、是ぞむ世に名高き某彫刻師の手に成れるものなり○白銀もて製れる鶴、黄金に彫りて模造れる鶴もありぬ○高き山の麓より、堀開ける長さ穴は、上に下に縦横に斜に、蜂の巣のやうに穿たれて、黄金、白銀の石塊を取出すべき、最大切ある場とは爲されぬ○黄金の器物に、銀の模様あるも、却々に麗し

小あるは種々に模型られたる父鎗やうのものより、大あるは世に名高き人々又は佛の像等に至るまで、銅もて製造られにき○銅もて製られたる器は、左まで美しからねど、くさくさ／＼とり／＼の用に適ひて、世の爲、却々に便利多きものされば、貴人も賤の男も皆押さへて珍重しつゝあり○鐵の用とし云へば、殊更に大なるものよ、銅釜釘針の類より、漁車漁船の機械等に至るまで、悉愈斯品に依りて製り出さるゝことされば○鐵は其が價こそ卑しけれ

夫々の役に立つ事

◎寶石

▲照りやまらざる

非常にてりかやく事

▲まばゆきまで

眼たゞまはば居られぬ位

にかやく事

▲習慣

自然に人々の風俗となり来れることおぼしき事なり

◎珊瑚

▲輝きつゝあり

つゞつとをきらきらと輝きながら輝きつゞつとを輝きながら

世に便利なることを金銀に勝るなり

◎寶石

夜光の玉の輝き渡りて、牀、天井の塵さへも視へ透かれぬ○指輪に飾られぬる金剛石の光り輝きて、周囲隈なく照りまらざるなり○紅寶石の襟飾、青寶石の髪飾、最うるはしう輝きて、まばゆきまでに燦々ぬ○黄金もて製られたる時辰器の鎖には、金剛石を挿める磁石器を添へてありき○歐羅巴、亞米利加の習慣なりとして、赤寶石、紅寶石を挿挟める襟、袖、腕さきの飾衣あり○眞珠、瑪瑙、琥珀等まで、皆さまざまに彫造られて、最うるはしき玉とは爲されぬ

◎珊瑚

滄浪の底より現出つる珊瑚てふものは、全く細微なる蟲の口より吐きつゝある石灰やうのものゝ凝固りて成れる器ありと聞く○珊瑚は白きあり赤あり、又淡紅の品も見ゆれど、其が形宛樹の如くにて、殊更夥多き枝を生じ、極めて美しく麗しきものにぞある○七寶の模様を焼附けたる鉢の中に、赤き色させる麗き珊瑚の植ゑられたるさま、眼ばゆきまでに美う輝きつゝあり○翠深き浪の底に、紅の色させる珊瑚の群り生せるさま、得も云はれぬ美さを透へてけり○くさくさの形に彫刻れたる珊瑚も見ゆ

雑の部

◎胃険

後のことは去來知らず、今眼前に大なる福あり、争でか人手に握らすべき、縦令山をす障りありとも、此腕をもて打排き、必ず味方のものと爲まはし○虎穴に入らざれば虎子を獲すとやら云へる謬あり、百千に餘る苦みくば、眞の幸には逢はぬとぞ聞く、い

◎胃険

▲去來

前々に委うときたり

▲争で人手に握らす

べき

どうして人に取らせうぞや

非らと云ふわけに成るなり

▲色あせる

色をいつて居る事

▲美しさを透へてけり

あつまりとらへてはいつて居ると云ふことにて、美しさが非常にたくさんであること云ふことなるなり

取らせはせぬと云ふ事

▲虎穴に入らざれば

虎子を獲すとやら

非常な難儀をせねば非常な幸はねられぬとやら云ふ事であるとの意なり

○富士詣

▲雲井遙に

雪の上、はるかなるところにと云ふ事

▲年来の望み

久しき、前々よりの望みと云ふ事

▲是より杖を曳かむ

是より出掛けやうと云ふ事

▲今にも

動もなくと云ふ事

で是より此身一人、艇に掉して浪に浮び、廣き世界を廻らさむ○ヒマラヤ山の頂まで雪の旅路を進まさむ○印度洋の水底まで潜入るべき手段もがな○人跡稀なる亞弗利加の、山の奥までも探りてけり

○富士詣

麓より仰見れば、雲井遙に高う現はれたる峯あり、今俄に登行かむこと容易からねど、年来の望みあれば、是より杖を曳かさむか○俄に雲に蓋はるゝときは脚下遠く雨りて、奇しき日和を見るもをかし○曙空の雲の色、とりぐ變はる風情ぞをかし○雲の上ある高き峯より、脚下遙に眺むれば、輝きわたる旭影、勢立ちて昇りつゝあり○今にも滑りやせむ、覆りて墜ちやせむと思ふばかりの險しき巖を攀ち、辛じて登り得たる頂より、脚下遠く眺むれば、水や空ある洋近し

○漁業

▲網引

網引きなれどもわきまどおひきとらぬてよむなり

▲漁火

いさりびとは、舟ばたにかかり火をたいて、魚が近かよせること

▲百千に百千を重ね

ける極めておびただしき事を云ふなり

○山獵

▲獵夫

狩りをする者をいふこと

▲荒れに暴れたる

○漁業

遠き浪路も近き渚も、漁舟の群りて、曳々聲を喧しき○網引をする漁人の数は、汀に餘りて算へ盡されまじ○沖の浪間に艇を浮べて、彼方此方に漕巡り、魚追ふさまの忙しければ、濱の砂を踏散らし、右往左往に駈走り、網引く姿の勇ましさ○最々暗き宵ながら、遠き滄海の浪を照らし、きらめきわたる漁火の、影に群る魚の数は、百千に百千を重ねけるよ○遠く沖合を眺むれば、浪のうねくさめさめきて、鱗の色の輝くあかさをば、縦に横に漕廻る。漁舟の勇ましさ○鱗の上を漕渡る艇のさまの雄々しさよ

○山獵

恐しきまでに生茂れる林の間、身を隠すまでに長伸びたる叢の裡等、右往左往に駈廻りて、夫兎よ、夫狐よと驅立つるさまの勇ましさ云はむ方なし○南の谷間より駈登る猪を目かけて、勢鋭く

非常にあれだちたることを
云ふ

▲血を見るまでには
けむをするまでと云ふ事

▲勝けたり
すべれたることを

○茸狩

▲賢る

わる口を云ふことなれども
茲では云ひまわることにな
るなり

▲人手には渡すまじ

決して他の人によるまじ
云と云ふ事

▲竊に生ひぬる

人に知れぬやうにはへて居
ること

撃出せる銃の音は、煙をのこして遠く飛去り、西の山路の木蔭に

入りぬ○勢雄々しき獵犬の命令につれて、彼方此處と駆巡る、五

ひさばかりの猛犬あり○荒れに暴れたる猪に對ひ、勢銳く飛び

かゝつて、血を見るまでに闘ふ犬あり○獵に慣れぬる猛犬は、
銃の響きを誦むじてや、負傷の獸を探ぐるに勝けたり

○茸狩

山の峯々打續きて、夥多の茸は生ひてけり○今日秋日和を幸に

多くの友と打ち連れて、北の深山に行きて見む、數限りまう生長

ちぬる、茸狩して遊ばむ○彼方の山に人聲して、あれよこれよ

と賢るは、茸を獲むとて騒ぎつゝあるをらむ○人手には渡すまじ

我必ず獲てくれむ、夫此處に在り、彼地に在り、轉び顧りて怪我

ばしすと、呻しきまで置驅ぎぬ○松の葉蔭の苔の下、塵芥の間
より、竊に生ひぬる茸も見えにき○山一渡り茸もて埋められぬ

○釣魚

▲小雨
少しばかりの小なる雨なり

▲濁江
どろ水の流るゝ河又は入海
のどころを云ふ

▲呂尚父

とは、年老ゆるまで官に仕
へず、既に白髪の人となり
てやうやく周王の請ひに應
じて軍事政略の相談役と成
りたり是世に太公望と云は
れたる人なり

○妖怪

▲こむもり

一々所へまゝく集りまじま
つたる形を云ふ

▲夜あゝ

○釣魚

濁れる河の岸に蹲りて、長さ竹杆を弄ぶものあり、如何なる魚を

獲つゝあるかは知り難けれども、却々煩はしき業をらむ○外より

想像れば、最煩はしき業のやうなれども、釣する人の心根は、却

々に面白きものと聞きはなりぬ○小雨ふる日の濁江は、釣する人

の寶の日ありと、或人は云ひ語りけり○終日釣すればとて、必ず

獲ものありとは云はれまじ○古呂尚父とやらむ云へる人は、直き

針もて釣せるうち、高さ位を得てけるに、我は今日まで十年あま

り釣める針をもて釣すれども、小魚の外は獲もやらず

○妖怪

専ものさびしき野末の邊より、怪き火船の立昇るさま、恐しむむ

を得も云はれず○しよろくと流るゝ小川の傍、こむもりと茂れ

る森の蔭より、夜あゝ現はるゝ怪しの火あり○北の山蔭ある墓

まじらへくともふ事

妖怪變化

此はまじらへくともふ事
とあれども、斯やうなる文
言は古よりえうくわいへん
げと音よみにしたる方多し
去れば茲にも其例にならへ
る也

地震

情なしにと云ふに同じ、尤
も場合により平氣を云ふに
用ゐるこも多し

將棋倒し

順々にだたくと倒れるこ
とを云ふなり

あわ

の壞れたるあたり、塔婆は倒れ草は生茂り、最物凄き風情あれば

夜更けて人の途絶ゆる頃は、怪しきものも現はるゝよと、或る愚

痴漢は語りさ〇如何に開けざる古さればとて、妖怪はさき管を

り、況して文明の代とありては斯る不思議のあるべき理まし〇妖

怪變化は皆我心の迷ひより現はるゝもののみ

地震

俄に揺動きて、家を倒し樹を覆し、人の貴き命をへも、心まう蠢
去るをど、最を怖しき限りにこそ〇瓦は揺ぎて浪のやうにうねり
てけり、壁、垣根は振動かされて、木の葉の如くに落ち重なりて
けり〇右に揺ぎ左に動く家々の間より、壁垣根の土碎けて、黒煙
のやうに立昇り、老も若も聲を限り、泣叫ぶさまの恐しきよ〇山
寺の塔は倒れぬ、社の前の華表は傾きぬ、市街も村里も、將棋倒
しの家の下、人の聲する間より、最恐しく烟は立ちぬ〇世に地震

地震のこもなり

洪水

夫と云ふ間もあら
ばこそ

夫れをけいこゑして、氣を
附けた間もなくして、直に云
ふであること多し

むらんやま

なまけなく、まごまごむら
たらしむらむらと云ふ意なり

たごあか

まご中の事なり

海嘯

實に理めりと覺え

はとまらばけさきものはあらじ借も〜

洪水

夫と云ふもあらばこそ、一度に寄來る洪水の勢には、鐵造りの橋
も力及ばずしてか、何時の間にかやら流されてけり〇樓の窓より、
此方を眺めて手を振り騒し、聲を限りに呼立つる人を其儘に、矢
を射るやうなる川水に浮べながら、下方をさして流るゝさまのむ
さんやま〇嗚呼助けてよと云ふ間もめらせず、牀を提げて去る
洪水の勢には、争で力の及ぶべき、家も人も田も畑も、洗はれた
るやうに流し盡されに〇聲を限りに呼べばとて、渦巻く水のた
ごあかれば救はむやうもめらせして、めれよ〜と云ふのみま
り

海嘯

世に海嘯てふものは、浪の底ある地境より俄に起るものありとは

らる

まゝに〜道徳のあまゝ
と、思はるゝと云ふ事なり

▲浪脚

浪の打寄せてくるをいふ
云ふ

▲みのげもよだつ

からだのきつとしてくるこ
とを云ふ

◎火災

▲ゆるがせ

そまつ即ちそのかには云ふ
事なり

▲恐しむむ

恐しむむと云ふに同

▲紅の舌を吐ける

學次に深き智者たちの言の葉よれば、實に理ありと覺えらる。○山

爲すやうなる暴瀧は、汀を目がけて打寄せけり。○唯一掃りの浪脚

に、磯の家々は洗はれてけり。○烈しう打寄する浪に洗はれて、濱

の邊は草樹も見えず、磯の彼方は家もあく人もあし、實に物凄

ことにこそ。○一期に打寄する海嘯の中には、夥多の舸艇もあり

世に稀なる寶もあり、人の貴き命もあり。○今更云はむも恐しきこ

とあがら、海嘯のさまを想像れば、みのげもよだつばかりあり

◎火災

唯一本の線香の火より數限りなき家々をも焼盡さるゝことあり、

然ればこそ火は急にせまじきものよと、心ある人は戒しめつゝあ

り。○烈しく吹立つる風の下、恐しむむまして燃えつゝある火の勢

は、いつはつべうとも思はれず。○紅の舌を吐ける如く、家々ど戸

ごどの軒下より、熱立つ火焰のさまを見れば、恐しむむと云はむ

火のもねたつ事を形容せる
ことばなり

▲灰と成りては詮も

あし
やけてしまふては〜かたが
ないと云ふ事

◎豊年

▲すべかむめれ

すべかむめれと云ふ事なり

▲黄みたり

黄色づく即ち類がみのりに
ゆく事

▲氣もいそ〜

氣分が勇みだちて〜き〜
して居ることを云ふ事なり

◎饑饉

やうあし。○算へ盡されぬ夥多の寶も、唯一點の火よりして、残り
さう焼盡されにき。○世に貴き人の身も、灰と成りては詮もあし、
實に火の災の恐しむむよ

◎豊年

見渡す限り田も圃も、豊に實れる今日を嬉しき。○西の山の手の小

田さへも、鈴のやうに實れる稻穂ゆ、耕しする身は云はずもがさ

世の人々は腹を敷として、歌ひつ舞つすべかむめれ。○今年はゆ

りさう稔り深く、國の榮えと成りてけり。○田面は隈なく黄み

てけり、鈴爲す稻穂のさやを見ては、あどて悦ばず居らるべき

○翁は新しき布子を被り、媼は下駄の鼻緒をかへて、最莞爾に笑

みつゝあり。○豊なる年の暮は、廊も都も賑はひて、初歳迎ふ氣も

いと〜、悦び祝ふ聲々高し

◎饑饉

▲借も

さて、文書の前にあるときは、云出しの言葉とをれど、文句の終りに借もあるときは、なげきの言葉と成るなり

▲天を仰いで

此は非常にたんそくする形容に用ゐる言葉なり

▲たまつもの

田につくりたるものなり

◎佛事

▲六字の名號

南無阿彌陀佛の六字のことなり

▲額

額を垂れておぼせしむるなり

借も拙き年のさまよ。田も畑も照る日に焼かれ、唯一莖の緑もなし

し〇餘りに雨降りつらきて、田畑残りさう水の中に沈められたれば、秋の成熟りは覺束さし〇悲しくも秋の成熟り少く、世の人々の

食として供ふるに足らねば、今は詮なくも天を仰いで、飢ゑたる

腹を撫でつゝあるのみ〇母に懐かれぬる縁兒は、乳を口にしまが

ら乳を口にむつかり乳を養ふ母は、乳を養ふべき食を口に咽びつゝ

あり〇飢に泣く親、饑に叫ぶ兒、何れも同じ悲みの聲々のみ〇最

さなげなき世ありけり、たまつものゝ穉らぬ年さへありと思へば

◎佛事

佛の法の道場には、最殿に飾られたる、黄金の器、錦の戸帳、

周圍をばゆく見えける間より六字の名號の聲は聞えき〇錦の法衣

水晶の念珠、最氣高き姿に添へて、佛の像の前に額を、讀經の聲

を澄ませつゝ、真心單めて祈るさまの有り難げあることよ〇夥多

▲真心單めて

一心不亂に云ふこと成るなり

▲有り難げある

有難がさうなると云ふに同じ

◎神事

▲神の威

神の御めぐわりのあまきらなるさまを云ふなり

▲祝詞

神の前にいろくど祈り申す言の葉を云ふ

▲詣づる

参るゝと即到ると云ふに同じ

▲鄙

田舎のことなり

二十女子美文の資料終

の僧の讀經の聲々は、香の煙のうちより發れり〇五色七彩の法衣、袈裟もて、飾られぬる僧の姿は、黄金、白銀を彫刻めたる器扉に映らひぬ、讀經の聲々は遠く渉りて、空行く雲の間に響きぬ

◎神事

青葉茂れる森のまかに、槍造りの社あり、雲に聳ゆる華表の傍より、長う連れる石段の、右も左も幟もて飾られけり〇神の威の高

ければ、今日の祭りは殊更、嚴あるやうに覺えらる〇禰宜が祝詞

の聲澄みて、詣づる人の柏手せはし〇黄金を飾れる神輿を擔ふて

彼方此方に往來ふ興丁、幟、屋臺を押樹て、右に左に遍歴ぐる

若男〇錐をたつべき際あさまで、人脚繁さ都の祭も、拙き神樂に

夜を明す鄙の賑ひも、神に仕ふる道は同じ、彼を想ひ此を思へば

實に貴きことにこそ

附録

名所美文の解釋

○常磐山 山城

▲二葉の松

常磐山の名物なり

▲常磐

いつせはしき色をかへりてに用ゐるなり

○音羽山 山城

▲ふもとの里

音羽山にそよたる名所なり

▲音羽の山風

音羽と云へば音のある風を

附録

○名所美文

○常磐山

常磐山二葉の松の緑こそ、千代も變らぬ色にぞありける○常磐山
峯も麓も縁増しけり○二葉の松は常磐ある、山に殊更榮えてけり
○常磐ある山の松風音涼し○常磐の山の翠されば、千代の後まで
榮ゆらし

○音羽山

音羽山霞のあかより現はれて、今日は殊更うるはしう見えにき○
音羽山ふもとの里の朝霞、春のけしきを罩めつゝありける○松風
の音羽の山に登らむむか○音羽の山の風、あがら最物靜に吹いて

らむに、靜なるとは不思議
だと云ふ意也

○御手洗川

▲御手洗川 山城

加茂の神社のほじりにある
川なり

▲もろで

左右の手と云ふことなり

○加茂川 山城

▲加茂の川水濁あけ
れば

加茂川の水は世に清きを以
て名あり

▲御萩

夏六月三十日に年中の災を
はらふ神事あり之をみそぎ
と云ふ

○深草の里 山城

▲深草の里の朝霧ふ

けりき

○御手洗川

御手洗の川邊の盤敷増して、水に映ふ影さへ隈なし○御手洗の川
水は澄みてけりき○御洗水川の水澄みて、夏の夕の景色ぞ増しけ
る○御手洗の川水は澄めること理され○御手洗の川水に、もろ手
の汚れを清めてけり

○加茂川

加茂川の水音涼しき夕とはありける○加茂の河原の夕景、柳の緑
いや増して、専涼う覺えらる○加茂の川水濁りあければ、最耻
う覺えてやら、住む魚さへも姿をかくしぬ○今日は御萩の塙すみ
て最静あり加茂の川を

○深草の里

深草の里の朝霧ふかければ、四方のけしきさへ入滯ふて見えにき○

かければ

深草の里と朝霧を渡りどか
け、又ふかければど、いろ
くに雲ひなしたる言葉な
り

○井手の山田 山城

▲来て見れば

行きて見ればど云ふへき所
にても来て見ればを用ゆる
事多し

▲井手の山田の蛙

蛙は井手の山田の名物なり

○双岡 山城

▲小笹ヶ原

双岡にそふたる名所なり

▲わか野

前と同じ

昨日より今日深草の里に来て、蟲の音を聞くことゝはありぬ○深
草の里は鶯の名所なりと聞さぬ○深草の里の蟲の音聞かまはし○
深草の露にひせびて蟋蟀さく

○井手の山田

井手の山田に来て見れば、最うるはしき玉水の光を増しける○井
手の山田の早苗より、最うるはしき玉水や滴るまらむ○井手の山
田の蛙の音は、風吹く儘に聞えけり○井手の玉川霧こめて、渡ら
む人の行程をわやうさ

○双岡

双岡の朝景色、専長閑に見えてけり○双岡の村雨は小笹ヶ原
に晴れてけるかき○松のむら立はの見えて、双岡に霞たさびく

○双岡の夜半の月、わか野の空に輝さぬ○双岡の夜半の月、
殊更に照りまざるらし

○廣澤 山城

▲まに／＼

其の望みのまに／＼に云ふ事
たなるなり

▲まこも

水に生ずる菰草なり

○宇陀野 山城

▲深雪に脚を停められ

たくさんの雪で、進むこと
が出来ぬと云ふ事

▲一／＼さり

五言にて七言にて其の
一組だけな云ふ

○片岡の杜 山城

▲強く暑を拂ふてけり

非常に暑氣を打拂ふた事

▲鶯の音を漏らすもを
かし

○廣澤

廣澤の池に映らふ月がけは、浮草のあまたに隠れてけり○浮草
のたよりよまに／＼影を映して、最うるはして見ゆる廣澤の池の
月よ○廣澤の池の激に月は宿りぬ○廣澤の池のまこもに水まして
夏の夕の涼しかりける

○宇陀野

宇陀野よりかへり路を急ぎければ、深雪に脚を停められて、思ふ
が儘にはかたさなりぬ○此處は宇陀野の果されども、燒野のあと
は見えやらず○宇陀野に杖を曳ける友より、詩一首送られにき

○片岡の杜

片岡の杜に吹立つ松風は、強く暑をばらふてけり○片岡の杜
の雪にうるはひて、蟲の鳴く音をすみにける○片岡の杜のあまた
の霞より、鶯の音を漏らすもをかし○片岡の杜のあまたに吹く風

霞の中より露の聲がきこ
るのや面白いと云ふ事

○春日野 大和

▲春日の小野

春日野を別段に春日の小野
と云ふ事あり

▲鹿の聲々

たぐさんの鹿の聲がきこゆ
ることなり

○吉野山 大和

▲今を盛り

まつさかり即さかり最中と
云ふことなり

▲花の山

山はたぐさんあるが樹の山
とは此山ばかりに云ふ意也

○初瀬山 大和

▲去來ゆきて見む

の、音にぞ秋は知られける

○春日野

春日野の霞のまかの景色こそ、眞の春と云はれける○春日の小野
に来て見れば、夏の夕の月もよし○春日野の雪の朝は一入面白う
眺めたる○春日野遠く盡の音を聞く○秋の夜の窓に月さす頃され
ば、いとよびし鹿の聲々

○吉野山

吉野山今を盛りの櫻花、霞とばかり視まがはれぬ○吉野の山の嶺
も麓も、櫻の花に埋められき○吉野山見ゆる限りは花と花のみ○
世に櫻の山は多けれども、花の山とは芳野を云ふのみ○花より出
で、花に入る、芳野の山の春は來にけり

○初瀬山

初瀬山杉の下葉に緑を以て、郭公の聲高し○初瀬の山の杉の葉に

此は前の本文のときまか
に委し

▲玉を散るまで

ばらばらと玉のやうになつ
て風にちることを云ふなり

○立田山 大和

▲實にからにしき

まことに唐より渡れる錦の
おりののやうだと云ふ事

▲春は緑秋紅の

春は青々としたる樹が多く
て秋は紅葉がさかると云ふ事

○芳野川 大和

▲水底いたくすみに

水底いたくすみにけり

水底いたくすみにけり、非常にきれ
いになつて、どこまでもすみ
て見ゆると云ふ意なり

○久米の岩橋 大和

霧立ちのぼる秋とはありぬ○去來ゆきて見む初瀬山、常磐樹しび
き夏の曙○初瀬山杉の下葉に置く露の、玉を散るまで風やふくら
む

○立田山

立田山今日は紅葉の色増して、實にからにしきを織りあせるかと
思はれき○立田山峯の紅葉の色々を、川瀬にうつして流しつゝあ
り○春は緑秋紅の龍田山○龍田川、水に流るゝもみぢばの、色
は錦にまがへぬるかき

○芳野川

芳野川水底いたくすみにけり○芳野川最すみわたる水の上に、櫻
の花を浮べてけり○昨日より今日を盛りと咲く花の香を流ゆる
芳野川ゆ○芳野川、流るゝ水の色を以て、花の香を浮べけるにや

○久米の岩橋

▲古の仙人

久米の仙人とて天に遷する
と云ふ御までも持つて居
つたもの、由に云傳へらる

▲久米ぢのはし

久米の岩橋の事なり

○三笠山 大和

▲遠き海海のおまた

古阿部の仲慶が唐にわたり
て遠く其地より東の方を眺
めて、あまのはらふりまの
見れば、すすなる、三笠の
山に出し月ひしとよむた歌
のあるより前の如き文語を
作れる也

○布留野 大和

▲刈萱

布留野の名物なり

▲尾花

前に同じ、尤も尾花はす
き冬枯れしてからの名な
れげ、すきお山ある事

久米の岩橋を訪はむかき、紅葉の盛りと聞くからに○久米の岩橋
に来て見れば、古の仙人の住めりと云ふ、鹿の跡のみ残りてける
○久米ぢのはしに苔を蒸しける○久米の岩橋に置く霜の消ゆる頃
とはありけらし

○三笠山

三笠山霞のさかに罩められて、ほのかに見ゆるも最をかし○望の
月影照りそふて、三笠の山の姿を高さ○遠き海海のおまたより、
三笠の山を見るどうれしと○月の出しはにすがむれば、三笠の山
の影高し

○布留野

布留野路に妻戀ふ鹿の聲すみて、専らびしう覺えてける○布留野
の奥の刈萱に、唧く蟲の音のあはれさよ○布留野の末の尾花より
秋風さむく吹きつゝありぬ○布留野の雉子の聲さけば、専哀を増

すばかりあり

○飛火野

飛火野の雲雀の聲ぞいと高さ○飛火野のすゝきに唧く蟲の音は、
専らはれを添へてけるかき○飛火野の野守のかげは見えぬとも、
小草が下に蟋蟀さく○飛火野の尾花が下に霜や置くらむ

○三輪

三輪の里より流るゝてふ、三輪川の水かさまさり、映らふ月の影
すみわたれり○三輪の田どとに早苗とる、曉ぞらに郭公啼く○三
輪の川水澄みては澄みけり○三輪の川邊に来て見れば、遠き霞の
山もありけり

○天の川

天の川水に映らう雁のかげ、秋の景色を増してける○天の河邊に
吹く風は、身に沁むまでに寒みけり○天の川、今舟橋を渡らむす

故之を名物と云はねば
らぬけれど、もわざと尾花の
みまもてはやす也

○飛火野 大和

▲雲雀

とびひ野の名物なり

▲野守

とは野邊のまもりをして火
事や草木のぬす人をふせぐ
役なり

○三輪 大和

▲田どと

あの田この田と云ふ事を
り併し信州の田どとの名所
とは違ふなり又此の三輪の
里は、おほあなむちの命の
住はせられたる名地と云ふ

○天の川 河内

▲寒みけり

寒さを感して来たに云ふ事

▲舟橋

前々には舟橋をもつて名高
かきとこるなりなり

○玉の横野 河内

▲今更に光り輝くに
はめらねど、玉の

横野云云

玉は云はむがために、今更
光り輝くのではないけれど
もどかけたる言葉也

○信太の杜 和泉

▲下草

とは樹々の生へ立ちたる下
に生茂れ草を云ふ

▲杜の車

車、或は車のとけたるの
が、或はぐにほづく
落つることを云ふ

◎吹飯の浦 和泉

る。人の影は見えずありぬ○天の川原の夕景色、翠を湛ゆる水や
ましけむ

◎玉の横野

今更に光り輝くにはめらねど、玉の横野の夕景色、照りをふま
に咲みつる。躑躅の花のうるはしさよ○玉の横野の露消えて、旭
はいたく昇りてけり○玉の横野の花つゝと、今を盛りと映出づれ
ば、夕日にまざる色ぞまばゆき

◎信太の杜

信太の里の春の月、杜の車の満るゝたびごと、斜に映りてうるは
しう見えにき○信太の杜の下草に宿れる蟲の聲涼し○信太の杜に
雪やふるらむ○信太の杜の秋の夕ゆ、蟲の鳴く音はすみてけるか
き

◎吹飯の浦

▲田鶴

かづなれどもわささたづ
としますなり

▲夕風

ゆふ力になつて風が落ちて
静なるけしきを能す事を云

◎須磨 攝津

▲汀に垂るゝ松ケ枝

松の枝が瀟々とは近く垂れて
居ること

▲船と船、鳥と鳥

たぐさんの船や鳥類と云事

◎浪速海 攝津

▲短きあしの節の間も

あしぐさの短し節と節の間
のやうなる僅のまどとてと
云ふ事

▲あしが散る

ふけるの浦にあく田鶴の、聲々高う聞えてけり○ふけるの浦の夕
風に、田鶴の聲は遠く聞えぬ○ふけるの濱の夕霞、波に漂ふ舟を
罩めて、得も云はれぬ景色をものしぬ○ふけるの浦の浪間より、
飛立つ鷹の姿をかしき

◎須磨

須磨の浦風ひくう吹きて、汀に垂るゝ松ケ枝より、琴の音色や聞
ゆらむ○須磨の浦邊に啼く千鳥、淡路をさして通ふあらむ○須磨
の浦浪静にて、往來の船の帆影白し○浪に往來ふ船と船、磯に翔
飛ぶ鳥と鳥

◎浪速海

浪速海短きあしの節の間も、絶えやらず往來ふ船よ○浪速海日ご
ど夜ごどに出入りする船の數々は、今更に算へもやられず○あし
がちらる浪華の浦の賑ひは、數限りなき船を見ても、最しむること

漢華と云はむ處に呼出しの
首葉として用ゐるなり之を
枕とせばと云ふ

○布引瀧 攝津

▲織あす姫はそも誰ぞ
布引なる織物をする女は誰
であるやらと云ふ意なり、
又そもとそもくど雲事を
縮めて用ゐたるなり、尤し
茲では先づの意と成る也

○住の江 攝津

▲皆面白う住の江の
たれしかれも昔々面白く住
む人々であると云ふことな
住の江の住に引きかけて云
ふたるなり、尤も住の江は
住吉の瀧邊をさしたるもの
なり

○玉川の里 攝津

▲春の色まさりけり

よ

○布引瀧

布引の瀧の白糸を繰りをさめて、織りあす姫はそも誰ぞ○布引の
瀧の水底ふか緑 唯見るさへも涼しかりける○彼方より此方に引
ける布あるかど、見まがふばかりの瀧の水、旭の影に映らふて、
最麗しき風情あり

○住の江

住江の岸にある浪は風を浮べ、返へす波には松風を乗せてけりあ
○住江の松の緑は千代こめて、常磐かきはにいや榮ゆらし○誰も
彼も皆面白う住江の、瀧に寄る浪年経るも、變らぬ御代の人にな
ありける

○玉川の里

玉川の里の曙霞こめて、長閑き春の色まさりけり○玉川の里の

春のけしきが盛になつて來
たとき云ふ事

▲雲井はるか

空たかく、遠方にと云ふ事
と有るなり

○有馬山 攝津

▲いさの笹原
有馬山にそふたる名所の名

▲雪解

雪がとけることを云ふなり

○伊勢の海 伊勢

▲瀬して

船が帆をたたくところのすべ
ての用意をしてと云ふ事な
り去れば、ふなふそほひと
よししよ

▲千尋の瀧

伊勢の波路をさして云ふ也

○神路山 伊勢

夕に霧こめて、往來ふ人の影遠し○玉川の里に防づる郭公、雲井
はるかに啼いてけるかあ○玉川の里に積れる白雪は、あたりまば
ゆくさくらめさぬ

○有馬山

有馬山いさの笹原風あきて、彼方の社に郭公啼く○我宿はこゝに
有馬の山の松、千代に榮ふなる緑やましけむ○有馬山峯の紅葉の
色をみて、鹿の音遠く聞えけるかあ○有馬山雪解の景色見にゆか
む

○伊勢の海

伊勢の海千尋の瀧に瀬して、漁りする身の面白さよ○伊勢の海、
浪路はるかに往く船の漣の音色は芽えてけりあ、雁の聲かと思は
れさ○伊勢海千尋の瀧に見ひらふ、童兒の聲を喧しき

○神路山

百枝

伊勢大神宮の御山なる松の木のことなり

五百枝

同じの樹をさして云へる也

網代の濱 伊勢

網代の菊

濱菊なり小なる花にてあじみの濱に榮えつゝ有と云

秋日和

小春と云ふて寒くもなし熱くもなく程よき天氣のときをさす也

二見ヶ浦 伊勢

浪の花

浪が風にふかれてばらくと散るさまを云ふ

限りなく群れてけり果敢ないまでにくさくさつまつたる事なり

神路山五百枝の杉の翠まじりて、夏の熱さも知らで過ぎける○神路山百枝の松の緑ふかく、五百枝の杉の梢を茂き○此方より雲井はるかに眺むれば、神の御山を最高き○神路の山の松ヶ枝には、千代よばふ鶴の住みつゝありける

網代の濱

網代の濱の秋の景色ゆ、最面白き風情あり○磯にさく網代の菊の花盛りかも○網代の濱の秋日和、今日を盛りと菊の花咲く○磯に咲く網代の菊の葉かげには、玉の露散る風や吹くらむ

二見ヶ浦

二見ヶ浦の浪の音、遠く千尋の水底より、響き渡れる心地とする○二見の浦に漕ぐ船の櫓にきらめく浪の花○打寄する浪の花は二見の浦の岩陰に、数限りなく群れてけり○二見の浦の磯影は、世に類なき眺にこそ

鳴海野 尾張

鳴海野

古は野原なりしも今は名古屋の鳴海と道々家々たり續きて盛なる場所と成れり

九うくくと鳴海淵

舞々鼓の音のやうに鳴ると云ふ事にかけたる言葉也

矧川 尾張

矧はもたねと矧川

矧はしつて屠らぬれども矢を取つて矧にあて向ひの力か射るやうなりと矧の川水の流れか形奪したるので有

小夜の中山 遠江

夜ふき石

古旅の女あり中山に通りけりて病となりたる間に子を産みたるも其女は死してけるため或る佛の助けにて船を興へて育てられたりてふ事あり即其子の母に捨てられて流し居つたところの石と云ふ事なり兼もり小説

鳴海野

鳴海野とは古の名のみ、今は夥多の家居あらびて、櫛の齒よりも最繁し○鳴海野のあまたに續く濱の松、往來の船の影をとめて、涼き風を送るらし○今たうくと鳴海淵、浪の彼方に千鳥や啼くらむ

矧川

矧川流るゝ水は澄みてけりあ、底に往來ふ魚さへも、指さしのばして算へらる○矧川に水増して、彼方の峯の影さへ映りぬ○殊更に矧はもたねと、矧川の水瀬こそ、射立るやうに流れける

小夜の中山

小夜の中山今日越えて、宿りの窓に枕してけり○早や目も暮れて小夜の中山、越えさむいものと思へども、燈火をければ歩みもやられず○小夜の中山に行きて見む、夜泣石てふものありて、拾賣る

尤も石は今尚中山に在り

○富士山 駿河

白鳥扇をさかしまに懸けたらむかど
白扇扇馬駒天と云ふ時がある
先之に上つて前背葉をつくれるなり又たわかどは何々であるやうに云ふことなるなり

○猿橋 甲斐

猿橋 甲斐
体記さる橋と云ふ是本我國一つである
即州防の鐘帯橋、越中愛本橋と合せて三奇橋と云ふなり

○熱海の温泉 伊豆

熱海てふ名に背かず
とほあたみの温泉はなかなり
烈しく其のわきいづるをきはぬと背して殊更に温熱すかきものなり
去れば

家もさばありき

○富士山

駿河に仰見れば、青空高く聳えける、富士の峯より嵐吹らし○
白鳥扇をさかしまに懸けたらむかと思はるゝ、富士の姿の貴さよ
○富士の高根は照りながら、麓の里には雨降るらし

○猿橋

見あぐるばかりの岩山に、懸渡しぬる橋の名を、猿と聞くと最をか
しや○猿橋とて奇しき橋あり、人の脚踏みたしかあらすば、容易う
渡り得られじと聞く○猿橋とは誰が名附けむ

○熱海の温泉

此處を名に負ふ熱海の温泉、四季絶へ間なき人脚の塵をさよひる
ことををかしき○脚の塵のみあらで、心の塵をも清めてむかど、
成る人は首はれにき○熱海てふ名にそむかず、熱き温泉は湧きつ

熱海と云ふ名の通りにあつき湯であるとの意也

○稻村ヶ崎 相模

新田義直が忠心云云
新田義直は南朝の帝に忠義をつくし、奉らむと心を決し、東より進んで鎌倉に攻入り、北條を打ちし、今に勝軍を斬りて龍神に供へむとて海中へ太刀を投入したるどころなり

○武藏野 武蔵

草より出で、草に入る云云
三百年前頃まではひろくなる草原にて、ちやうど月が草より出で、草に入るやうであつたのに、今は数限りなき家が建てられて、其月が草より出で、草に入るやうになつて来た云ふ事

○隅田 武蔵

我思ふ人はありや

あり○熱海とは面白き名ありける

○稻村ヶ崎

新田の君が忠心もて、龍の宮居に捧げにし、劍の痕はありやあし
や○稻村ヶ崎の浪音高く、鎌倉山に響きける○此處は名將新田の君が、一圖にこつたる忠心もて、夥多の敵を亡ぼしける、世に有難き行あり

○武藏野

古の武藏野の月は、草より出で、草に入りけるが、今は人々の家
居のみ打續きて、瓦より出で、瓦に入る、奇き風情とありてけり○
武藏野にすむ蟲の音は、所々に響はるとを聞く○武藏野とは古に稱へける名のみ、今は大都として限りある賑ひつゝあり

○隅田

隅田の川水縁り深ければ、堤にあらふ櫻の花、一入うるはしう映

古拙なる者が人買ひに

ちよよのちよよ
千代田城 武蔵

千代田城

此は今の皇居なり、古本
道波が綱張りして築きたる
徳川家康の代に至り美
とにとりつくろひて備へ
へたる城なり、尤も今の皇
居は外構へのみ古の儘なれ
ども、中の建物は建て改め
られたる事なり

筑波根 常陸

今日殊更に身に沁

今日に至りて取別け身に沁
みてけり
たへいみじむことなつた
と云ふ意なり

水かさ

水の高き即水の分位と云事

りてけり○隅田の川水に船を浮べて、櫻の蔭に掉せば、錦のさか
を行くかと思はる○隅田川の堤に沿ふて、我が思ふ人はありやあ
しやと、言問ひにける人もありき

千代田城

千代も變ちて榮ふある、城の名を想像れば、専長く覺ゆるあり○
畏くも大君の住はせ玉ふ御城の名は、千代田とこそ呼ばれける○
廣き世界にも稀ある御國あれば、大君の住はせ玉ふ宮居の名さへ
最目出度も千代田城と呼はる

筑波根

筑波根の峯よりなるす寒風は、今日殊更身に沁みてけり○筑波嵐
の裾に拂はれ、彼方に遠く吹雪して、専寒さを増してけり○筑波
根の嶺よりおつるみさの川、昨日今日の雪解にや、水かさ増さる
けはひあり

滋賀の里 近江

古の宮居

天智天皇のいませし宮居な
り、古は帝の御代くして御
都合に任せて都をせへませ
らるることであつたので、
同帝の御代には滋賀を以て
都とせられたるなり

姨捨山 信濃

愚なる男あり云々

或る男が邪なる妻にすゝめ
られ自分の老母を山寺に佛
事ありと欺きて誘出さるに
山ふかく打捨て、歸りける
が、不幸なること、感じて
復々山に登り老母をつれか
へり、邪なる妻を離別した
どの話あり

日光 下野

四十八瀧

裏見、勝ふり、華嚴の如き有
名の名所あり、尤も水の源は
山上の中禪寺前の湖なり、

滋賀の里

滋賀の里、古の宮居の跡は何處あるか、今更問はむやうさければ
櫻がもどに訪れて、花に思ひを遣りてけらしき○滋賀の湖に浮べ
る舟は、近く唐崎に宿りてけり遠く矢橋に歸りてけり

姨捨山

姨捨山に照る月は、専ものすこう眺めらる○古愚なる男あり、よ
からぬ妻にすゝめられて、老いたる母を捨てけるより、斯く奇き
名を負ふてけるかよ、嗚呼憂しや、姨捨てふ山の名を聞くたにも
袖は涙にぬるゝばかり

日光

翠もて取繞ける山のさかに、朱に染みぬる玉垣あり、黄金白銀も
て飾られたる社あり、まばゆさまでに輝きて、最嚴に見えにけ
る○四十八瀧てふ名所あり、何れも美事ある水の色よ○翠深き森

此は徳川家康を記れる東照宮のある所也

◎松島 陸前

右より眺むるも左より視るも云

何れより見ても千種萬様の美事なるけしきが現はれてくる事を云へるなり、権龍神社を記れる名地なり

◎衣川 陸中

古の雄々しき人

は阿部の頼時、貞任等を云ふ

賢き二人の大丈夫

源の義家と阿部貞任を云へるなり

◎天の橋立 丹後

天の橋立

のまかに、黄金の宮居は建られき

◎松島

右より眺むるも左より視るも、とりく變はる松のさま、くさくさ異なる島の影○千賀の浦浪静まれば、とりく映らふ島の影、松の梢どもももに、翠を添ゆるばかりなり○松の枝ぶりとりく浪に映ふ景色かき

◎衣川

古の雄々しき人が築きける、碧の跡もありと聞く○年をへし練の素れのくるしさに衣のたては綻びにけりと、賢き二人の大丈夫が、戦ひの場にありながら、詠みかはしたる言の葉あり○衣川に映らふ月は、古も今も變らじき

◎天の橋立

最美しくも海のまかに引連らねたる砂地あり、右も左も寄る浪の

◎天勾踐の句

小島高徳が櫻樹を削りて天勾踐の句、時非真范濂を削りて、長くも後醍醐天皇陛下を御助けあらせられたり、下やうと越王勾踐を助けたる范濂のやうに高徳なるものがあるから何ぞ忠勤致しますと云意を示したる事

◎船阪山 美作

まどかある月、即十五夜なる望の月の事

とりくに見ゆ

いろくさまく變つて見ゆる事

◎舞子 播磨

おぼしませ

◎舞子

うねく映らふ松の數々○長う引連らぬるまでに、砂の橋を架ける如き松原あり、世に天の橋立とぞ名附けらる○浪に映らふ松ヶ枝をおぼしませと爲む天の橋立

◎船阪山

舞子の濱の松ヶ枝より満る露にうるはふてや、直砂の色もとりどりに見ゆ○まどかある月の影さす濱松に、秋風強く吹きにければ、琴の音色にまがへるまで、最うるはしき聲すあり○舞子てふ濱の松ヶ枝は手を伸ぶるやうに見えにける

忠心の程を申さむとて、櫻の幹の皮を削り、天勾踐の句を記せる喜しき行為を遺せるかき○院の庄に来て見れば、忠心ふかき益良夫が、筆を染めたる櫻木の、花の名譽を遺してけり○船阪山に風は吹けども櫻の花は散りもやらず

宮島 安藝

潮に浮ぶ宮居
宮島は遠く海中につき出し
て建設せられたる社なり
尤も千潮のときほ遠く浪を
ひいて一面に砂地と成り
満潮のときは水殿の下まで
海水たよふて頗る絶景の
ものである

壇の浦 長門

修羅の海
古源平の戦ひあり遂に平家
の一門が打亡せられたる
ころなり

赤旗白旗

源氏平家の兩軍がிரりみだ
れて戦ふたるとまを云ふ也

八島 讃岐

此處は名に負ふ八
島の里

宮島

潮に浮ぶ宮居のさま、得も云はれざる趣あり○緑の水に浮びぬる
朱の宮居の美しきかゝる○宮居の牀の下かけて、翠を湛ゆる潮の浪
爾宜が捧ぐる燈火の光を浮べぬ○最宏なる宮居をば、浪に浮ぶる
とは、面白や

壇の浦

今は唯青み渡れる浪ばかりなれど、古は赤旗白旗の入りちがふた
る修羅の海、生死の叫びを、浮べけることの恐しきよ○壇の浦邊
に風立ちて、汀近う飛ぶ鷗、戦ひのさきは白浪の、寄するがまゝ
に浮びつゝあるのみ

八島

八島の海の浪の音、往來ふ船の影と共に、彼方此方に漂ひける○
浪に映らふ船の影、汀に交飛ふ千鳥の聲○八島の里に煙立ちて、

和歌の浦 紀伊

詠まれし人は今い
づこ

此は名高き八島と云ふこと
にて、古安徳天皇の御所あ
り又源平兩軍の戦ひをもつ
て、殊更に名高き場所であ
ると云ふことなり

筑紫潟 筑前筑

不知火
古から筑州肥州の海の沖に
は空火が燃ゆるので斯く知
らぬ火と云ふ名あるなり

筑紫潟

古筑前筑後とも一所にて
となへたのである、今は二
つに分たれてあれど、筑紫
潟とすれば總体の名と成也

和歌の浦

和歌の浦に潮みちくれば、浪立ちて、蘆邊につどふ水鳥の聲高し
○和歌の浦曲の浪間より、生茂りぬる蘆が根に、眠れる鷗の翅を
白き○名も面白き和歌の浦浪と、詠まれし人は今いづこ

筑紫潟

知らぬ火の筑紫の里に行きて見む、古神武の大帝の長くも巖し
玉ひにし、蘆屋の港もありけるなり○不知火の現はれけるまゝに
火の國てふ名さへありき○筑紫潟、浪の彼方を眺むれば、高麗の
山さへ視ゆるかと思はる

耶馬溪

石あり草あり又樹あり、水あり魚あり又人あり、其が趣のよきなり

○耶馬溪 豐前

山にも水にも優れ

ぬる風情

山水に優れたる事即天然の景色にすぐれて何ともかきも云へりみことなる風情がさるる事ふことなり

をまゐること。今更筆もて書きもやられず、又言の葉もて、云ひも盡されじ。○耶馬溪と云は、誰も知る、我が西國の名所あり。○山にも水にも優れぬる風情を此處に集めける

名所美文の要語解釋 終

附録名所美文 終

明治卅六年九月廿四日印刷
明治卅六年九月廿八日發行

定價金貳拾錢

著 者 鶴 廼 舍 千 登 世

發 行 者 岡 本 仙 助

印 刷 者 吉 村 源 次 郎

印 刷 所 山 田 元 吉

二十世紀 子女美文の資料



發行所

大阪市東區北久太郎町四丁目

書肆 岡本偉業館

電話(特)東區八七番

新刊廣告

藤井鶴城編著

○二十世紀美文の資料 全一冊

世間既に美文の資料と題せる書類多々あり、然れども其多々あるを厭はず、茲に二十世紀美文の資料として、新なる一書を發見したるは、其の文語章句の優秀卓絶精巧明美にして、近來無比の良編なればあり、殊に新珍重要なる目次四百種を設け、四千有餘の類語を列ね、更に其類語に就き、悉皆丁寧親切なる解釋を加へたるものなれば、素より學生修學上の良師友たるべし、否學生のみならず、常に斯文を學ぶものため、一日も缺くべからざるの寶典たるべしなり。

大阪市東區北久太郎町四丁目

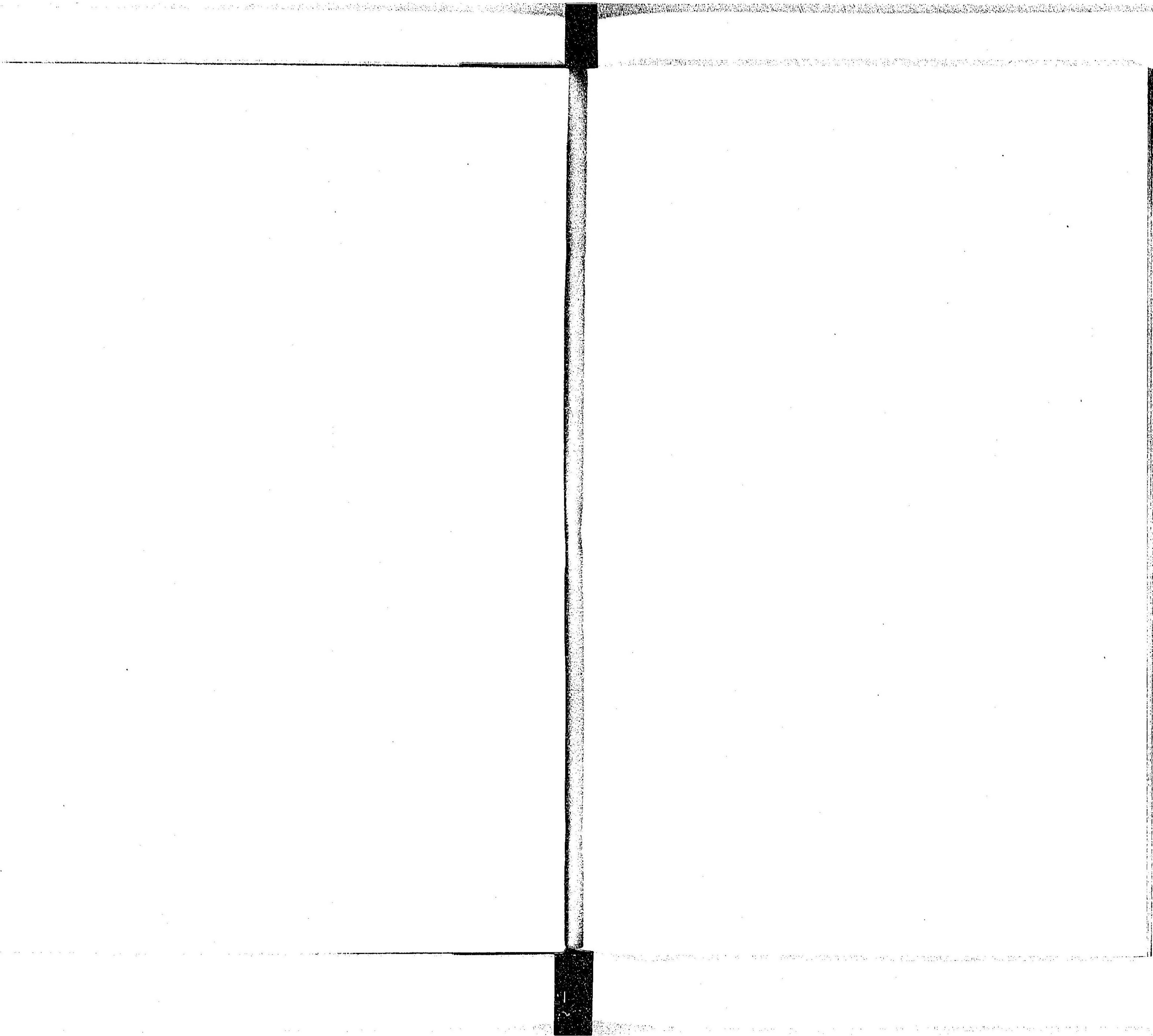
發行所

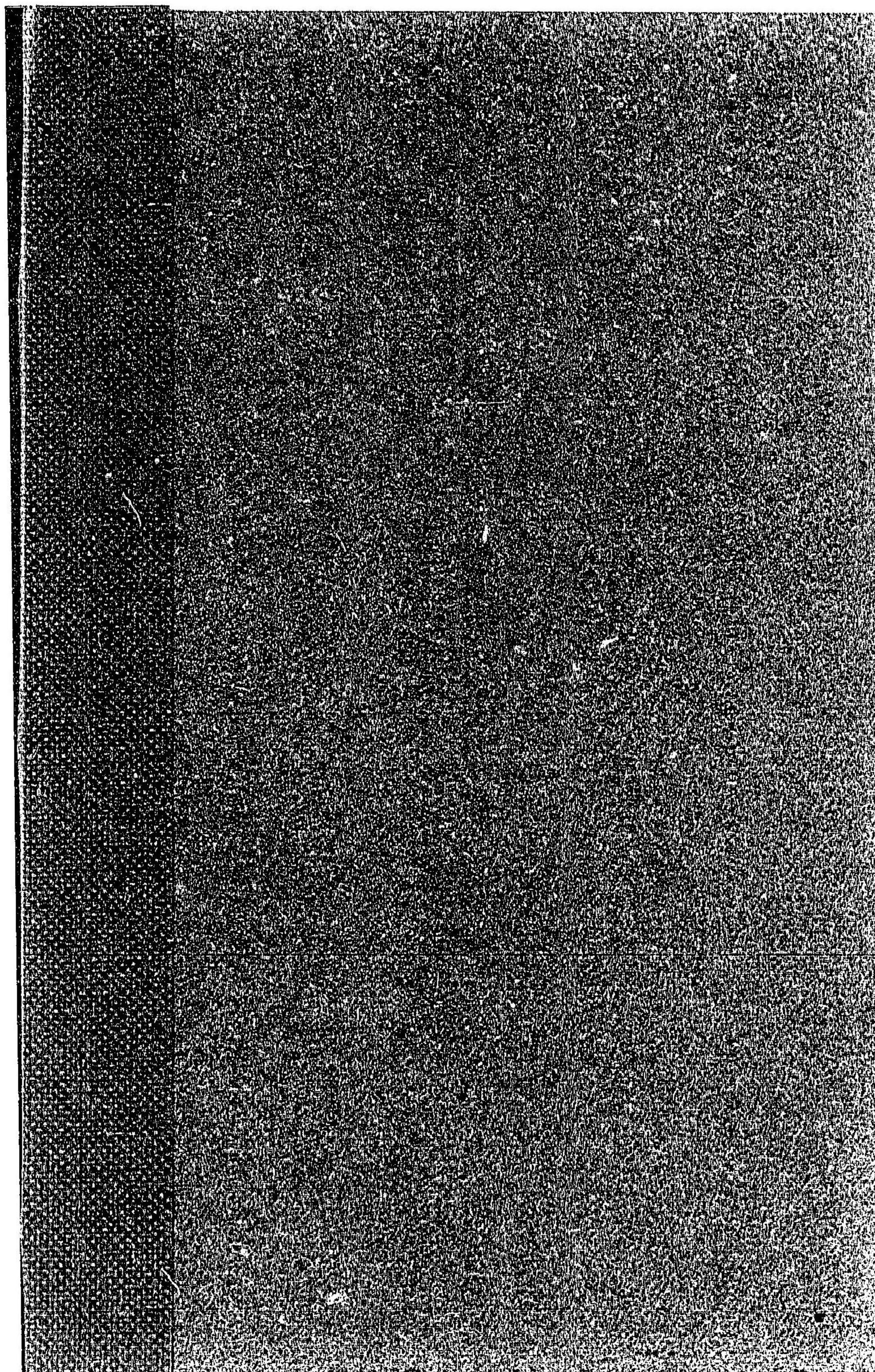
岡本偉業館

電話(特)東區八七番

工 3437







特19

372

080807-000-7

特19-372

女子美文の資料

鶴廼舎 千登世 / 著

M36

DAC-5069



